
KURO ~ 気まぐれネコは事件と遊ぶ ~

アマノガサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KURO〜気まぐれネコは事件と遊ぶ〜

【Nコード】

N4006Y

【作者名】

アマノガサ

【あらすじ】

僕は、ネコを飼っている。性別は、女の子。とんでもない気まぐれで、とても自由な存在。両親がめったに帰ってこない僕にとって、彼女との生活は風変わりだけどかけがえのないものだ。そんな彼女はあるものに強い興味を示す。今回彼女が興味を示したのは、僕の通う高校で起きた女子生徒の自殺事件。でも、ただの自殺なら彼女が興味を示すはずが無い。ならきつと、この事件はただの自殺では終わらない。そこにはきつと、『謎』がある。彼女がそれを望むのなら、僕はそれを調べよう。その先に、どんな事実が潜んでい

プロローグ（前書き）

基本的にフェアな推理が出来るような形で進めて行きたいと思えます。

途中で犯人の目星がついたとしても、推理小説の性質上、ネタバレになるような発言等はお控え頂けると幸いです。

作中で人の死についての不適切と捉えられる発言等が見受けられるかと存じますが、この物語はあくまでフィクションです。

加えて、あらゆる物事に対しての考え方に絶対の規律は存在しません。どのように考えるにせよ、自己責任において完結するものであり、本作品は本作品内で述べられる思想等を諭すものでも押し付けるものでもございません。

純粹に物語として楽しんでいただだけますよう、よろしく願います。

プロローグ

学校指定の制服に身を包んだ少女の姿は、まだ人気のない校舎の中にあつた。

グラウンドでは先ほどまで朝練の運動部がわいわいと部活にいそしんでいたが、ちょうどこの時間はランニングで校外に出してしまうため、一切の雑音は聞こえない。

この一時は、まるで世界が動きを止めてしまったかのような静寂が支配する。

少女が歩を進めるたび、タンタンと足音がリズムを刻む。彼女は迷いなく校舎の中を進み、とある階段の前で歩みを止めた。

体の向きを変え、少女はゆっくりと階段を登る。踊り場で反転し、すっと視線を送る先には、屋上への出入り口がある。

それを確認して、少女は制服のポケットに手を入れる。中を探り引き抜かれた手には、一本の鍵。可愛らしくデフォルメされた猫のキーホルダーがついていた。

鍵をぎゅっと握り締め、少女はおまじないをかけるようにその手を胸に当て、わずかにうつむく。

数秒ほどそうして、彼女は意を決したように顔を上げ、残りの階段を登りきる。

扉に鍵を差込み、ガチャリとロックを解除する。少女の手は、わずかに震えていた。

やや錆ついた音を立たせて扉を押し開き、少女は早朝のややひんやりした空気にその身を晒す。

屋上には何も無い。外周を全て二メートルほどの高さを持つ金網に囲まれている他には、ただコンクリートの床がひろがるのみだ。

いや、出入り口の搭屋から出てすぐ右手。金網の一部が破損して

おり、フェンスの体をなしていない場所がある。白のビニールテープが貼られ、『危険近づくな』というお手製の看板がゆらゆらと風に弄ばれていた。

少女の視線は、そんな看板の下に向けて固定される。

ビニールテープの向こう側。屋上の縁に、重石を乗せられた白い便箋のようなものが置いてある。

それを確認すると、少女はどこか焦ったように小走りで壊れたフェンスへ近づき、躊躇なくビニールテープを潜った。

そつと重石をどかし、綺麗に折りたたまれていた便箋を手取る。大切なものを手放すまいとするかのように便箋を胸に抱き、その後で少女は慎重に便箋を開いた。

「……え？」

便箋を開いた少女が驚きの言葉を吐き出した直後、彼女は背後から衝撃を受け、つんのめるようにして前方に、屋上の縁の向こうへと体を投げ出した。

宙に舞う少女の体。風を受けてぱつと広がる髪。その一瞬だけを切り取れば、まるで天使が天空より舞い降りたかのような芸術的な一枚になっただろう。

ただし天使の顔は、これから襲い来る死の恐怖に酷く歪んでしまっているだろうが。

甲高い悲鳴が空しく響き渡り、数秒と立たぬ内に聞こえたくちやりという不快な異音と共に、ふつつりと途絶えた。

そしてネコは動き出す。

僕はネコを飼っている。

名前は『クロ』。割と小柄で、性別は……女の子、だ。

ああ、えと、飼っているというのは語弊があるだろうか。

実際のところ、彼女は勝手に僕の家に居着いており、それに対して僕がご飯と寝床を提供しているに過ぎないのだから。

どちらかというと、彼女が主で僕が召使いといった方が正しい……のかも知れない。

まあ、それはいい。そんな事より彼女の事をちよつとだけ話そう。好物は魚。特に生魚と煮魚を好む。焼き魚は小骨が喉に引っかかるのが嫌なのか、あまり好きではない。

でも、秋刀魚だけは大好きなようだ。焼いても生でも頭から食べていたし。

嫌いなものはイカ。理由は単純で、食べるとすぐにおなかを壊すからだ。

食欲は旺盛だが、全体的にほっそりしていてしなやかな印象を受ける。まだ子どものはずだが、美人さんだ。これは間違いない。

彼女はお腹が減ればご飯を求め、眠くなれば昼寝をし、暇になればちよつかいを出してくる。

こうしてみると自堕落でややぐうたらかもしれないが、まあ特段珍しくもないだろう。

ただ、これがまた輪をかけた気まぐれさんで、彼女はいつもふとした拍子にいなくなる。

そしてこちらの心配をよそにいつの間にか戻ってきて、お気に入りになっている居間のソファでくつろいでいたりする。

基本的には無傷で帰ってくるのだが、たまに擦り傷や引っかき傷を作って帰ってくるので、僕が治療してやっている。何をしてきたのか問いただしたいところだが、無駄な努力になるのでそこはスル

ーだ。

さて、いつもならばもうそろそろ、僕の作る朝食の匂いに釣られてやってくる頃だ。

今日のメニューは豚肉のしょうが焼き。彼女は肉も嫌いではない。ふと、背後に気配を感じ、チリリと軽やかな鈴の音を聞く。

首だけ振り返ると、そこにはやや眠そうに目をくしくしとこする、黒色を纏った彼女がいた。

「やあ、もうすぐ出来るよ。クロ」

「……にー」

一つ鳴いて、彼女はテクテクとテーブルへ向かい、椅子に座る。

黒色のネコミミ付きナイトキャップを被り、真っ黒なパジャマにマジックテープにより着脱可能な黒猫尻尾を身に着けた彼女は、両手をだらんとさせて行儀悪く身体をテーブルに預けている。

彼女が小さく身じろぐ度、黒いチョーカーに付けられた銀鈴が音色を奏でた。

その姿に軽く嘆息しつつ、僕はガスを止め、焼きあがった肉を皿に盛り付けた。先に作っておいたサラダを冷蔵庫から取り出し、肉の皿と一緒に彼女の前に置いてやる。

白米は後で味噌汁と混ぜて出すとしよう。

彼女はスンスンと犬のように料理の匂いを嗅ぎ、ちらりと僕の方へ視線を向ける。

僕が頷きつつフォークを渡してやると、彼女は肉にフォークを突き立て、しょうが焼きのタレがポタポタ垂れるのも構わずにそれを口に運んで、もくもくと咀嚼を始めた。

傍から見ると、多分微笑ましい光景なのだろうとは思う。が、実際のところたまに餌付けしているような錯覚に陥る。

いや、初めて会った時にこうしてご飯を与えたことが居着く理由になったのだとすれば、これは間違いない餌付けなんだろう。

我が家に居着いたネコは、腰まで伸ばした綺麗な黒髪を持つ、翡翠色の瞳が印象的な、可愛くて小柄な色白の少女なだけけれど。

自分の分のご飯を用意しつつ、僕はテレビのスイッチを入れる。
今日も今日とて、ろくなニュースは流れていない。

政治家の汚職事件。有名人の脱税疑惑。どこかの小学校で起こった教職員の性犯罪。隣街で起こった銀行強盗事件。僕の通う高校の近所で起こった交通事故も報道されている。

そんなニュースをご飯を食べる片手間に眺めていると、突然携帯が鳴った。

着信を確認すると、中学からの友人でクラスメイトの春日野宗也かすがのそつやからだった。ついでに時計を確認すると、現在時刻は午前七時半である。

こんな時間になんだろうかと首をひねりつつ、僕は通話ボタンを押す。

「もしもし?」

『あ、シロ。やっと出やがったな』

電話口から開口一番、そんな言葉が飛び出してくる。

やっとと言われてもこれが最初の着信なのだが、つまりはコール回数が多かったと言いたいのだろうか。

ちなみに、シロというのは僕の愛称だ。犬や猫みたいだという評については甘んじて受け入れようと思う。

「何? 宗也。こんなに朝早くから」

『お前今テレビ点けてるか?』

「うん。点けてるよ」

『チャンネルを五にしてみる』

「え?」

『いいから』

宗也の態度を不審に思いつつ、僕は言われるがままにチャンネルを五に合わせる。すると、

『 であり、死亡したのは同校の生徒で間違いないようです。この事件はわずか十分ほど前に発生したもので、ただいま警察による現場検証が行われております』

興奮しているのか、やや早口な女性リポーターの姿が画面に映しだされる。

「どうやら生放送のようだ。先ほどから方々へのやり取りのお粗末さ加減がひどい。上手く收拾整理できていないのが丸分りだった。」

『回したか？』

「うん。回したけど、これがどうかしたのか？」

生放送で事件報道というのは確かに珍しいかもしれないが、この程度のことでは電話をかけてくる理由が分からない。

『シロ、気が付かないのか？ リポーターの姉ちゃんの後ろをよく見る。校門が見えるだろ？』

「ん？」

言われて、リポーターを無視してその背景をよく見る。

「……………げ」

僕は思わず顔を引きつらせた。画面に映る校門には見覚えがある。加えて、その近辺にちらちらと見え隠れする人物達が着ているのは、僕が持っているものと同じく学校の指定ジャージだ。

ズボンは紺色一色だが、上着は白と紺のツートンカラーで、その境界は薄水色・水色・青色の三色ストライプでグラデーショナルっぽく色分けされている。

『分ったか？』

「うん。もしかしなくてもこの事件現場、あらがみ荒神高校だよな」

どうやら自分の通う学校で事件が起きているらしい。しかもチャネルを回した直後にチラッと死亡とか何とか言っていたから、多分学校の生徒が亡くなったのだろう。うん、大事件だ。

『ああ。いやマジびっくりしたぜ。って事で俺はカメラがいなくなっちゃう前に学校に行くから、シロそのニュースの録画頼むわ』

「は？」

『バッチリ映ってきてやつからよろしく』

「あ、ちよつと待」

言い終える前にガチャリと通話の切れる音がして、続いて空しい

までのツーツー音が聞こえてきた。この音のもの悲しさは是正されるべきだと思う。

やれやれと溜息を吐き出しつつ、僕はテレビと兼用のDVDレコーダーのリモコンに手を伸ばして、何も無いテーブルにぺたりと触れた。

「あれ？」

先ほどチャンネル変更した時に置いた位置にリモコンが無い。はてとリモコンの所在を探ると、いつの間にかクロが持っていつていた。しかも指の位置からしてすでに録画をスタートさせている。

まさか今の会話を聞いていて気を利かせてくれたのだろうか。

「クロ？」

「……………」

呼びかけるが、返事が無い。彼女は右手に持つフォークにしようが焼きを突き刺したまま左手でリモコンを握り、先ほどまでの眠たげな目をパツチリと開いて、テレビ画面を凝視していた。

テレビ画面の中では相変わらず女性リポーターが早口にまくし立てている。

内容にほとんど変化が無い。重要そうなキーワードは荒神高校、二年の女生徒、屋上から落下、グラウンドで目撃、午前七時直前などといったところか。

クロと一緒に僕もじっとテレビを見る。そんな、無駄に意識を集中している最中、

「……………キー」

クロが、鳴いた。

鳴いて、ゆっくりと、彼女は僕の方へ顔を向ける。

宝石のような翡翠色の双眸が、僕を射抜いた。

「……………始まり、だね」

透き通る声でそう言って、ぱっと、花が咲いたような笑顔を作る。美しく、可憐で、けれども儂く、背筋が凍りつくほどの魅力を持つ笑顔。

何度見ても、見る度に魅せられる。僕を惹き付け、虜にして止まない笑顔。

だから僕は、彼女に尋ねる。

「今回は楽しめそうかい？ クロ」

「にー？」

さあ？ とてでも言っているかのような、曖昧な返事。けれど、

僕には分かる。この事件は彼女の興味を引いている。だから、

「にー」

クロが笑う。無邪気に、笑う。

ネコは首を突っ込むもの。

「ってなわけでき、なんかテレビに映るの禁止とか言ってるわけよ。うちの先生方が」

教室に入るなり、僕はいきなり柔道家体型の男子生徒にヘッドロックをかけられた。筋肉質の腕にがちりと頭を固定され、息苦しい。

とはいえ、猫の甘噛みのように見せ掛けだけで手を抜かれているため、痛くはない。痛くはないが、

「やめる宗也。汗臭いしむさい」

「けっ。なーにがむさいだこの犯罪者め。タメの癖にあんな可愛い女の子困ってるくせに。しかもあんな格好までさせて。羨ましいんだよこのリア充が」

「別に困ってない。勝手に居着いてるだけだ。それとあの格好はあいつの趣味で、僕が着せてるわけじゃない」

弁解もむなしく、宗也はふんふんと鼻息荒く、ぐいぐい僕を締め続ける。が、しばらくして飽きたのだろう。ふっと解放され、僕は生臭い空気から一転、新鮮な空気を肺に取り込むことが出来た。

「あーあ。俺も可愛い彼女欲しいなあ」

宗也が両手を後頭部に回して愚痴をこぼす。大人顔負けの堂々たる体躯で、肌は日に焼けて健康的な小麦色。短く刈り上げた黒髪は針金の様にツンツン立っていた。

顔立ちは同性の自分から見ても間違いない格好いい部類に入る。性格はややお調子者だが明るくさっぱりしていて、おまけに中学時代は柔道の全国大会で優勝したほどのスポーツマンとくれば、異性からの人気は相当のはずなのだが。

「宗也。君、結構モテるはずだね。柔道の大会とかで黄色い声援を浴びていたじゃないか」

「あー、なんつーか、俺ああいうちゃらちゃらしたの嫌いなんだよな。ミ〜ハーってやつ？ 俺の好みはもつと清楚で可憐な子とか、守ってあげたくなるような可愛い子なわけよ」

可憐と聞いて、ふとクロのことを思い出す。彼女は傍目に見れば可憐と言えなくもないだろう。線は細い方だし、小柄で身長も高くない。

ただ、その本質を知る身からすれば、彼女はただ愛でられる花とはわけが違うのだが。

「まあ、女の子の話は置いておいて、そうなると結局宗也はテレビには映れなかつたわけ？」

「いや？ 普通にバッチリ映ってたと思うぜ？ でも、ちょうど放送の合間だったんだよな。んで、そうこうしている内に春ちゃんがつつ飛んできて、背負い投げ一本それまでつてな」

「……春霞先生相変わらず容赦ないな。さすが元五輪女子柔道金メダリスト」

僕は百五十センチという武道において恵まれない身長ながら、小さな竜巻の異名を持つ体育教師を思い浮かべる。体育の種目選択で先生の容姿にだまされて柔道を選択してしまった者は、その実力を知って恐れるかファンになるかの二極化をたどるのだ。

僕と宗也は先生の實力を知った上で柔道を選択したのでまだいいが、何も知らずに先生に舐めた態度を取った生徒の末路は いや、やめておこつ。

そんな事よりも、もつと気になることがある。

「テレビの件はそれとして、それなりに早く来たんなら何が起こったかは把握しているのかい？」

「ん？ おお。まあニュースで言ったことにちよこつと付け加えるくらいだけだな」

宗也がその太い腕を組んで、記憶を探るように視線を斜め上に向けた。

「えーとだ、まあ簡単に箇条書き、つーか箇条言いい？ するぞ。」

まず死んだのは一個先輩の女の人。名前は奥山おくやま宏美。事件発生は七時ちよつと前。死因は転落死。屋上から落ちた、っつーか身投げしたらしいな」

「自殺？」

「ああ。落ちる瞬間を見た奴がいるし、屋上には遺書と靴があつたみたいだぞ」

これは僕が家を出る段階ではまだ報道されていなかった事実だ。しかし、本当に自殺なのだろうか。もしもただの自殺であれば、何故彼女は反応したのだ？

おかしい。彼女がそんなつまらない事に興味を示すはずが無い。直感的に何かを感じ取ったからこそ、彼女は今回の事件に興味を示したはずなのだ。だとすれば、何かしら動きが出るはず。

「……どした？」

「いや、なんでもないよ。それじゃあ今日はしばらく自習で、その後一斉下校か何かになりそうだな」

「じゃねーの？ まさか今の状況で授業とかやらねーだろ。現場に近い教室の生徒も適当な空き教室に移動させられてるしな。っと、そういえば聞き忘れてたけどよ、今日は」

宗也の言葉を遮るように、教室の黒板側の引き戸が音を立てて開かれた。それまでざわついていた教室も、突然の出来事に一瞬静かになる。

そんな静寂に包まれた教室の内に、一人の背の高い女子生徒が足を踏み入れてきた。

その姿を見て、僕は思わず「げっ」と声を漏らしてしまう。

視線の先、彼女は姿勢よく背筋をピンと伸ばして歩く。その動きに合わせてさらさらと揺れる、背中まで伸ばされた黒絹のような艶を放つ髪。だが、その綺麗な黒髪は少々長く伸び過ぎて彼女の目を隠してしまっており、少々野暮ったい印象を受ける。

が、首から下のプロポーションは反則級だ。正確な数値は知らないが、少なくともD以上と噂される豊満な胸。細い腰に安産型のお

尻と男子生徒の夢が具現化されたような存在だった。

教室中の視線　主に男子の　を一身に集めながら、しかし彼女はまるで気にした様子もなく、一直線に僕の下へと歩を進めてくる。そうして僕の前に立つや、

「シロ君。ちよつとよろしいかしら？」

凜とした声でそう言った。この人は、いつも突然だ。

「え……と、何か御用ですか？　静先輩」

「新聞部としてちよつと放っておけない事があるの。部員として手伝ってくだらないかしら？」

「……僕は名前だけの幽霊部員なんですけど……？」

確かに僕は新聞部に所属している事になっているが、それは部を存続させるための名義貸しに過ぎない。本当のメンバーは僕を除く四名。目の前の部長である朝霧静先輩あさぎりしずか以下三名が本当の新聞部員だ。当然、正式なメンバーではない僕はめったなことでは部活に参加しない。

だというのに、以前ちよつとした事で先輩の手伝いをしてからというもの、僕は頻繁に先輩から個人的な呼び出しを受けるようになってしまったのだ。

大抵の場合厄介事な上に、本当に先輩の個人的な内容である。

「存じておりますわ。けれど、書類上は確かに新聞部に席を置く身でしょうか？　なら、部長である私の言う事に絶対服従ではなくて？」

「いやいやいや。高校の部活動の部長に絶対権限なんかあったらとんでもない事になりますよ」

「そうかしら？」

「そうです」

相変わらず何かずれてとんでもない事を言う先輩だ。加えて、僕が言外に『嫌です』という意味を含ませていることを分っているくせに全く引いてくれない。

いつもなら諦めてしぶしぶでも手伝うところだが、今回は先輩よりも優先順位の高い問題がある。こちらで引くことは出来ない。

「そう。分りましたわ。いつもいつも無償で働いて頂くのも悪いですし、ここは対価を用意しましょう」

「あの、先輩？　今回は有償無償関係なくですね、僕にもちよつと野暮よ」

「今度の休みに、私とデートというのはいかが？　もちろんその後はラブホテルなり貴方の家なりに連れ込まれる事もやぶさかではありませんわよ？」

「は？」

言われた事の意味が一瞬分らなくて、僕の思考はフリーズする。だが、周囲のクラスメイト達は正しくその言葉を理解してしまったようで、

「ウオオオオオツ！！」「」「」

大歓声が上がった。

耳が痛いと思ったら、隣で宗也も両腕でガッツポーズを決めながら同じように声を上げている。

「うふふ。どうかしら？　私のこの体、好きにして構いませんのよ？」

両腕を組んでぐいとその大きな胸を強調する静先輩。溜息のように吐き出される甘い息。その官能的な動きに男子生徒たちがさらなる歓喜の声を上げる。

「乳神様じゃ、乳神様がおるぞ！」

「ありがたやありがたや。俺、今日はこれでお腹一杯になれるわ」

「つつーかシロ羨まし過ぎんだろ。リア充死ね！」

「なんでシロばかりもてるんだよ。あいつあれでさらにもう一人可愛い子捕まえてるんだぜ？」

「年下の妹系美少女だっけか？　ってか何その擬似姉妹井展開。誰得だよ」

「シロ得だろ？　かたや豊満ボディのお姉さん。こなた獣つ娘属性付つるぺた妹ちゃん。やべ、自分でまとめてはらわた煮えくり返ってきた」

「天誅だな。帰宅ルートは調べがついている。決行は明日の下校時刻でいいか？」

何か恐ろしい話までちらほら聞こえてくる。その上、

「やーね男って。あんな女の何がいいのかしら」

「結局男なんて女の身体が目当てなのよ。あーやだやだ」

「先輩も先輩よね。わざわざ下級生を漁りにくるんだもん」

「私のお姉様に手を出す害虫は駆除しなくちゃ。駆除しなくちゃ」

女子の一部から先輩の誹謗中傷その他が入り始めていた。状況が非常によろしくない。

「先輩ちよつと」

僕は先輩の腕を掴み、早足に教室から立ち去る事にした。これ以上この場に留まっても百害あって一理無しだ。正直なところ先輩の自業自得だが、そのとばっちりを僕まで受けるのはごめんだった。各教室前を避け、僕は人気のない下駄箱まで先輩を引っ張っていく。

「一体どういっつもりですか？」

一応あちらこちらに誰もいないのを確認して、僕は先輩を問いただす。さすがに、先ほどの発言はやり過ぎだ。

「あら？ どういっつもりも何も、対価として私の処女を差し上ると」

「「ぶっ！」」

先輩のオブラートに包まれない発言に噴出すと同時に、誰かもう一人も噴出した。さつと声のした方へ視線を向けると、筋肉質な腕が物陰に隠れきれないではみ出していた。

「……宗也？」

「……さすがに今の発言は反則でしょうよ朝霧先輩」

のそりと物陰から宗也が姿を現す。先ほど確認した時は誰もいなかったはずなのだが、一体どうやって潜んだのだろうか。

「そうかしら？ 私としては持てる手札の中で最高のものを切ったつもりなのだけれど」

右手を頬に当てながら静先輩は首を傾げる。この人の場合、真面目に言っているから性質が悪い。

「まあ、それはいいですね。それで、先ほどの件なのだけれど、承諾しては下さらないのかしら？」

「えと、申し訳ないんですけど僕もちよつとやりたいことがあります。とんでもなく魅力的な申し出だとは思うんですけど、その…」

そう、いくら先輩が対価を示しても、僕の考えは変わらない。隣で宗也が信じられないものでも見るような目で僕を見てきているが、努めて無視する。

そりゃ、僕だって健全な男子高校生だ。そういう事に興味が無い事はないし、他の生徒以上に静先輩の魅力も知っている。ぶっちゃけすっごいもつたいたいという事も自覚している。

それでも、僕の中の優先順位に変更はない。僕の中の優先順位第一位は、いつだって決まっているのだ。

「そう。残念ですね。この件はきつとあの子も興味を示す事だと思っただけねど」

「……はい？」

聞き逃せない台詞が静先輩の口から漏れた。静先輩が『あの子』という対象を、僕は一人しか知らない。

「そういえば、あの子は来ていないのかしら？ 今日絶対に来ると思っていたのだけれど」

「あ、そういやそうだ。俺もそれを聞こうと思ってたんだよ。今日は黒猫ちゃん来てねえのか？」

二人から来る同じ内容の質問。クロの所在。

「多分、来てると思いますよ。僕が朝食の片付けをしている間にいなくなっちゃいましたけど、朝のニュース見て興味津々でしたから笑っていた、とは言わない。クロの笑顔を知るのは、僕だけではない。」

「そうなの？ それじゃあそろそろ何か起こりそうね」

「ですねえ。現場の近くは警察が見張ってつから、何かあるとすればきつと」

「ごらっ！ 待ちなさい！」

宗也の言葉にかぶさるようにして、第三者の大きな怒鳴り声が聞こえてきた。

とつさに声のした方向、校舎の玄関口へ顔を向けると、ちょうど一人の少女が全力で急制動を駆けているところだった。

真っ黒なネコミミ帽子。これまた真っ黒なミニのプリーツスカート。その影に揺れている黒猫の尻尾。足は黒のオーバーニソックスに覆われ、靴だけは何故か学校指定の黒いローファーをはいていた。

そんな黒一色の中、首に巻かれたチョーカーに取り付けられた銀鈴が、チリリと軽やかな音と共に白い光を反射する。

「にーっ！」

あまりにも見覚えのある少女は次の瞬間には僕に鋭いタックルを仕掛けてきており、不意を突かれた僕は当然その衝撃に抗えぬまま、

「ぎゃふっ！」

我ながら情けない声と共に後ろへ倒れこみ、

「がっ！」

受身を取れぬままに後頭部を強打した。そのまま、意識が遠のいていく。

「にっ！」

視界が黒に侵食されていく中、最後に僕が見たのは不思議そうに首を傾げる、キョトンとした可愛いクロの顔だった。

謎の臭いはネコを呼ぶ

黒い世界の中で、深いまどろみの中にある。

時折聞こえる誰かの声は、不明瞭で聞き取れない。

ふと、猫の鳴き声を聞いたような気がした。

そう考えた瞬間、僕の意識は急速に覚醒に向かい、

「はっ！」

閉じられていた瞼を勢いよく開き、しかし光のまぶしさにすぐさま目を閉じる。薄く目を開いて徐々に目を慣らしつつ、今度こそ僕はしっかりと両目を開いた。

まず視界に飛び込んできたのは、ソファアに座る静先輩と、その膝にもたれかかり、頭を撫でてもらっているクロの姿だ。二人とも黒くて長い髪の毛をしているので、本当に姉妹に見えなくもない光景だった。

ただし、何故か九十度横に倒れている。いや、これは僕が横になった状態で前を見ているという事になるのか。

「お。やっと起きたか」

頭の上から声がする。ちらりと視線を向けると、宗也の顔があった。それがどういう事を意味するのかに気がついて、僕は跳ね起きる。

「あら、それだけ動けるのなら大丈夫そうですね。気を失った時はびっくりしましたけれど、春日野君のおかげかしら？」

「朝霧先輩の頼みでなければ御免被りたいところっすけどね。何が悲しくて野郎に膝枕せにやならないんすか。俺あ是非とも先輩か黒猫ちゃんに膝枕して欲しいところっすよ」

「考えておきますわ」

静先輩がクスクスと笑い、宗也が仏頂面を作る。

そんな二人を観察しつつ、僕はざっと周囲を見回した。

向かい合わせのソファア。ガラステーブル。スクリーンサーバー

のかかったパソコンとそのラック。壁に掲げられた額縁は新聞部の掟十ヶ条の文字。隅の机の上には数台のカメラが置かれ、その他雑多なものがあちらこちらに存在する。

「どうやら何もなく、今現在僕は新聞部の部室にいるらしい。何故だろう？」

「おめーが黒猫ちゃんに飛びつかれて嬉しさのあまり鼻血出して失神したからだ」

「まあ。いやらしいですわ」

「えっと、僕は別に記憶の混乱から言ったわけじゃないですからね？ 普通なら保健室とかで目が覚めるはずが、何で新聞部の部室に運ばれてるのか疑問に思っただけです」

「これ幸いとばかりに僕の事をいじろうとでも考えていたのだろう。二人は僕の返答を聞くと、そろって口を尖らせてすねた気持ちをアピールしてくる。

「アピールされたって困るわけだけど。」

「別に頭打って気を失うなんざ柔道やってりゃ日常茶飯事だし、俺の見立てで軽い脳震盪だと思ったから保健室に行くまでもないってな」

「それで、わざわざ保健室を経由して改めてこちらに来るのも面倒でしたので、真っ直ぐにおいで頂いた次第ですわ」

「……あれ？ 何でだ？ なんか僕はちっとも心配された様子がない。」

「心配して欲しかったのか？」

「心配して欲しかったんですの？」

「途中までハモったすごい疑問系だった。何でそんな事をする必要があるのかとも言いたげな感じだ。」

「いや、別に心配して欲しかったわけではないんだけど。」

「あ、そうだとそれよりも」

「不毛な考えをわきにどけ、僕はそもそもの事の発端に意識を向ける。即ち、未だ静先輩の膝の上でゴロゴロしているクロについてだ。」

僕が目覚めたことには気がついていないのだろうけど、よほど先輩に撫でてもらうのが気持ちいいらしく、フニヤけた顔で動く気配が無い。

仕方がないのでクロから話を聞くのは断念し、

「僕が気絶する直前、なんかクロ誰かに追われてませんでした？」

「ええ、追われてましたわね。どうも封鎖された現場に侵入してしまっただようですわ」

静先輩の言葉を聞いて、背中に冷や汗が出る。という事はあの時の怒鳴り声は警察関係者というわけだ。ちよつとまずくないですかそれ？

「あー、それは何とかごまかしといた」

「え？」

僕は弾かれたように宗也へと視線を向ける。こういった情報操作はむしろ静先輩が何かしら動いてくれそうなものだが、なんと宗也が何かしてくれたいらしい。

……嫌な予感がする。

恐る恐るその事について尋ねると、

「簡単な話だな。ちよつとしたものを隠すときは、もっと大きなことをやりやいいんだ。皿を欠けさせちまったら、それを誰かに割らせれば欠けた事は無かった事にできっただろ？」

得意げにそんな持論を展開する宗也。駄目だ、嫌な予感が確信に変わっていく。

「んで、黒猫ちゃんが現場に侵入したせいで追っ掛けてきた刑事さんに、この子の『飼い主』はそこで伸びてる奴だって言っちゃったわけ。ペットの不始末は主人がつけるものだから、主人が起きるまで待っててな」

いい考えだろう？ と得意満面の宗也。何がいい考えなのか小一時間ほど問い詰めたい気分だ。何をどう解釈すればその言葉でも文章でも即刻お縄に付きそうな弁解が妙案だというのだろう。

「捕まりやしねえよ。別に監禁してるわけじゃねえし、強要してる

わけでもねえしな。黒猫ちゃんが自分で善悪を判断できないとかそういうわけでもなく、本人の意思でそうしてるって所をキツチリと分らせて帰ってもらったわけよ」

「あの時の刑事さんのお顔、とても楽しかったですわ。何かこう、怒りと嫉妬と羨望がない混ぜになりつつも、殿方として逃れ得ないエロスへの渴望と申しましようか。そういったぐちゃぐちゃの感情の発露が見事でしたわ」

やや頬を赤く染めながら、ほう、と静先輩が官能的な息を吐き出す。何故この人はこう、いちいち艶かしいのだろう。

「そうっすね。なんかもー、捕まらないなら俺もこんな子を飼いたって顔してましたね。ありや間違いないくろリコンですよ」

宗也が両腕を組んでしみじみと頷いている。何を悟ったような事を言っているのか。

「ロリータコンプレックス。性的な興味がなければただの子供好きですのにね。けれど、この子の可愛さの前ではそれも致し方ないかもしれないわね」

静先輩がクロの頭を撫でていた手をスツと伸ばして、柔らかな曲線を見せる脇腹から腰にかけてを一撫でした。

「にふっ」

くすぐったかったのだろう。クロの身体がピクンと反応する。

「ああ！ 本当にもう可愛いですわ。食べてしまいたい」

静先輩の形のいい唇からちろりととぞく赤い舌。上気した頬と合わせて、見ているだけでゾクゾクとした何かが湧き上ってくるような気がする。

そんな感情を持ったのは僕だけではないようで、

「くっ。こんな先輩がいるなら俺も新聞部に入っておけば……いや、しかし柔道を捨てることは……。はっ！ 掛け持ちという手も」

「ないよ」

アホな考えを口走る友人に反射的な突っ込みを入れる。

どうしよう。何かこのままだと収拾が付かなくなりそうな気がする

る。

「えっと、そろそろ話を整理しませんか？ 何か脱線した後別の路線で走ってまた脱線してる気がするんですが」

「そうですね。お一方余計ですけど、役者は揃い踏みですわ」

「へ？ 朝霧先輩、余計なのつてもしかしなくても俺っすか？」

「ちょっと悲しそうな顔で自分を指さす宗也を無視して、静先輩はコホンと前置きの咳払いをする。」

「今日の用事は他でもありませんわ。今朝方起きた女子生徒の死亡事件についてですの」

「にっ」

静先輩の言葉を聞いて、それまでムニムニと半分寝ていたクロが、ぱっと身を起こした。そのままじっと、次の言葉を待っている。

「今朝の死亡事件。警察は遺書の存在から自殺の線を優先して追っていますわ」

それは当然だろう。飛び降りた瞬間を目撃した人もいて、遺書も靴も発見されているのだ。これでもかというほどに、状況証拠はそろっている。

死んでいる状況に不審な点が見受けられなければ、特に疑問を挟む事無く処理されるだろう。

気になるとすれば動機だが、特に理由もなく自殺する者もいる時代だ。それらしい何かがあればそれが理由に据えられるだろう。

特に学校側に関係のない理由であれば、なおさら。

「亡くなった奥山宏美は本校二 D に在籍しておりましたわ。部活は文芸部。交友関係はそれほど豊富では無かったようですわね。性格的な問題から、どちらかといえばクラスでも浮いた存在だったようですわ」

「って事は、いじめかなんかにでも遭ってたんすかね？」

宗也の推測は最もだ。クラスで浮いた存在はいじめの標的になりやすい。そしてそれを苦に自殺。警察が採用するに無理のない展開だ。

「そうですね。ここで話が終わるのであれば、それが最もありえそうな話ですわ」

「へ？」

静先輩の続きを含ませた言葉に、宗也は肩透かしを食ったような顔になる。

「奥山宏美には交際相手がいきましたわ。それも、本校の教員ですの。静先輩の言葉に、僕は軽く息を呑み、宗也が口笛を吹く。

ク口は全く動じず、じつと静先輩の方を見つめていた。

「さらに、私の調べではその教員は他にも複数の女子生徒、教員にも手を出してますわ。かく言う私も、一度ならず声をかけられているのですけれど」

最後の部分、静先輩は明らかかな侮蔑の感情を滲ませた。前髪に隠れて僕の位置からは彼女の目を見ることは出来ないのだけれど、絶対零度の蔑みの瞳をしていることは想像だに難くない。

ちようと真正面に位置する宗也が、突然ぶるつと体を震わせたのがいい証拠だ。

「具体的な名前は全て抑えているのですけど、それはまた後でお伝えいたしますわ。問題なのはそこではありませんもの」

「と、言うこと？」

「奥山宏美は今日までの一週間の間で、この男性教員と付き合いのある、もしくはあったと見られる女性全てと接触しているようですよ。もちろん、この学校の中だけに限った話ですけれど」

当然私もその一人ですわ、と静先輩は奥山宏美と接触した時のことを付け加えて話し始める。

曰く、話は二人っきりの状態で、交わした会話はごくわずか。

たった一つの単純な質問。

『貴女は先生と付き合っているのか？』

ただそれだけだという。

静先輩はその質問に対し『いいえ』と答え、奥山宏美はすぐに引き下がったという事らしい。

「他にも何人が同じように話しかけられた方にお話をうかがったのですけれど、少しでも反応を示した方にはしつこく根掘り葉掘り聞こうとなさっていたようですわね。言い合いになった方もいらっしやっただそうですわ」

ちよつとしたトラブルになったものもありそうな話だ。だけど、その程度のトラブルで何かが起きるような事になるだろうか。

「でも、こつやつて事実を並べてみると、すんなりと今回の件を自殺と片付けてしまうのは暴挙のように思えませんこと？」

先ほどから静先輩は淡々と話を進めている。けれどその内容は一貫して、今回の事件を自殺以外の何かである、という事に尽きる。

「静先輩。先輩は今回の事件、自殺だとは考えていないという事ですか？」

僕の言葉を聞いて、静先輩はにやりと笑った。ようやく、といった雰囲気だ。

「ええ。これは自殺ではありませんわ」

僕の隣で宗也が身を固くしたのが分かった。彼としては当然な反応だと思う。

「何故、自殺ではないと言い切れるんですか？」

これは当然聞いておくべき疑問。といっても、僕自身この事件は自殺ではないという思いはある。でも、それはクロの行動から判断したものであり、それ以外の確信を持っているわけではない。

けれど、静先輩は何かしらの確信を持った上で自殺ではないと言う。それはどういう事なのだろうか？

僕の問いに、静先輩は再び口元に笑みを浮かべる。ちらりと、前髪の奥に隠された先輩の瞳を見えた。それは口元と同様に、笑っているような気がした。

「私、今日はちよつと朝早くに部室に来ましたの。ちよつと陸上部の方が朝練習をしておりますわ」

「え？ 朝練つて、そんな時間だと校舎は施錠されて入れないはずですよ？」

当然ながら、学校は夜間の間は施錠された上にセキュリティをセ
ットされる。

荒神高校の場合、部活動の朝練習の申請があつた場合はその時間
に合わせてセキュリティを解除し、一時的に校舎内への立ち入りを
許される。だが、その後はすぐに校舎外に出されてまた施錠される
はずだ。

そんな僕の疑問に対し、

「ここだけの話し、私、学校の合鍵を持っていますの」

静先輩そう言つてはポケットから一本の鍵を取り出す。それには
デフォルメされたネコのキーホルダーが付いており、クロがピクリ
と反応したのが分かった。

「正確には朝の六時半ですわね。その時間からこの部室で作業をし
ておりましたわ。奥山宏美が転落死したという午前六時五十四分、
窓からはとても綺麗な青空が見えましたの」

静先輩の言葉を聞いて、僕は彼女から視線を外し、その後方にあ
る窓から外の景色を眺める。程よく白い雲が浮かぶ、青い空。

そういえば洗濯物を干している時、今日は良く湯きそうだなと思
った。

事件が起きた時刻に窓から見えた青い空。それが何だというのだ
ろうか。

「分らなくて？ だって私、それ以外は何も見えていないんですよ
？」

クスクスと、何か面白いものでも思い出しているかのように、静
先輩はそう言った。

見えない。

それが、どうしたというのだろうか。

見た、と言つのなら分かる。自殺ではない決定的な何かを見た
のならば、それは確かに自殺ではないと断じる理由になる。

けれど、静先輩が言ったのはその逆。見えない、である。

どうということだ？

「……シロ君」

ヒントを差し上げますわ、と静先輩がピツと人差し指を立てる。

「この新聞部の部室が、学校の何処に位置しているかお忘れかしら？」

部室の位置。ここは校舎の三階で、すぐ隣には屋上への階段が

あれ？ 屋上への階段があるという事は

ふと思いつき、僕はソファから立ち上がったと窓に身を寄せた。鍵を開け、ガラス窓を引き開ける。ふわっと、それまで停滞していた空気の流れを感じつつ、窓から顔を出し、真下を向く。

眼下の景色は大別して三種類。視界の上から緑の生い茂る植木のライン。黒っぽい土がむき出しのライン。そして白線で引かれた人型が確認できるコンクリートのライン。灰色の上の真新しい赤黒い血痕が生々しかった。

「なるほど。だから見ていないのはおかしいというわけですか」

「そうですね。もしも六時五十四分に件の女子生徒が転落なされたのだとしたら、六時半からこの部屋にいた私はその姿を窓越しに確認しているはずですね。けれど、実際には何かが落ちた音を聞いただけで、その姿を見てはおりませんの」

グラウンドから目撃された転落の瞬間。同時刻、落下音のみでこの部室からは確認できなかった転落者の姿。しかし、その無残であるう姿は間違いなく真下に存在した。

まるで、窓の前を通る瞬間だけ透明にでもなってしまったかのようだ。

「その事を警察には？」

「もちろん言ってますせんわ。だって、そんな事を伝えてしまったら私が学校の合鍵を所持している事がばれてしまいますもの。そんな面倒な事は嫌ですわ」

やれやれとでも言いたそうに、シズカ先輩は溜息を吐いた。

確かに、一生徒が学校の合鍵を所持しているとなればかなりの問題になるだろう。

それに、本来その時間にいるはずのない人物がそこにいたとなれば、今回の事件の関連性を疑われる。最悪の場合、犯人扱いされるとも知れないのだから。

「シズカは、こんな事しない」

チリリと、軽やかな鈴の音が部室に響く。

僕をはじめ、その場に居る全員が、声の主に視線を集める。

クロはソファアーの上にぺたりと座り込んで、両手で身体を支えた格好のまま、

「シズカは、こんな下手で、こんなおかしくはしない。シズカだったら、もつと上手に、もつと綺麗にするよ」

そんな事を言う。

なんだろう。多分シズカ先輩の事を褒めているというか何かだとは思うのだけど、別の意味が含まれているような気がしないでもない。

その違和感はシズカ先輩にもあったのだろうか。そつと手を伸ばしてクロの頭を撫でつつ、

「ありがとう。一応、褒め言葉として受け取っておきますわ」

前置き付きの返事を返している。

静先輩に撫でてもらって、クロはご満悦だ。にー、と気持ち良さそうに鳴いている。

「ところで、下手でおかしい、というのはどういう事なんですの？」

ふいに、静先輩がクロに問う。

「に。だって、狭いんだよ？」

迷いなく、淀みなく、クロが言葉を紡ぐ。紡いでいく。

「落ちたところ、狭いの。せいぜい、二メートル。もう少し遠くに行っちゃうと、土の上か植木に落ちちゃう。そうしたら死ねない、死なないかもしれないんだよ？」

ぱつと、僕はもう一度窓の外へ顔を出し、真下の状況を確認する。

白線で模られた人型は、コンクリートラインと黒土ラインとの境ギリギリに位置している。もう少し向こう側だったら、コンクリー

トではなく土の上に落ちていたはずだ。

「死にたい人、どこかに引つかかりたくない。だから、遠くに飛ぶの。でも、遠くに飛んだらコンクリートに落ちれない。難しい」

背後からクロの言葉が聞こえる。

確かにそうだ。自殺は自分を殺すためにやる。まかり間違つて死ねなかった場合、相当の激痛を味わう事になる。そんなものは望まれない。

だったら、死に損ねるリスクを最大限減らそうとするはずだ。高いところから落ちて土や植木の上に落ちて一命を取り留めたという話はさして珍しくはない。

もしも自分なら、ここを自殺の場所を選ぶだろうか？ それなら回り込む必要があるが、この校舎の裏手の駐車場のほうがほぼ確実にコンクリートに落下できるはずだ。

確実性を落とすような、そんな下手は打たない。

「死にたくない人、どこかにすぎる。届かなくても、すごろうとする。だから、近くに落ちる。コンクリートに落ちる」

なるほど。それはありえる話だ。ただ、生きようと必死になった結果が死の危険をあげてしまったのだとしたら、実に救われない話だろう。

そうして死にたくないのに落下する。それはつまり

「奥山宏美は自殺じゃなく、誰かに屋上から突き落とされたってか？」

「に。ソウヤ、えらい。満点」

僕が言うより先に宗也が結論を述べ、クロが万歳して宗也を褒める。

「けど、んじゃあその犯人は何処に行ったんだろうな。奥山宏美の落下が目撃された時、朝霧先輩がこの部屋にいたわけっすよね？」

隣の階段から誰か降りてくるような音とか気配とかなかったんすか？」

「多分、なかったと思いますわ。私、外から悲鳴が聞こえるまでは

窓のそばではなく廊下側に近いところで作業をしていましたから。誰もいないはずの校舎の中で、すぐその気配に気がつかないほど鈍くありませんもの」

さすがに別の階ともなれば話は別ですけど、と付け加えつつ、先輩は当時の状況を語る。

一般的に見れば静先輩の証言は何の根拠にもならないが、僕にとつてはキツチリとした判断材料になる。

これを元に、一つ確認しておく必要があった。

「静先輩。屋上から降りてくる人ではなくて、屋上へ上がっていく人もいませんでしたか？」

「屋上へ、ですか？」

わずかに口を開けて小さな驚きを示した静先輩は、しかしすぐにもう一度記憶を探り始め、

「いない、と思いますわ。下で悲鳴を上げていた方々が警察に通報してしまつた時点で私も早々にこの場を離れてしまいましたから、そこまでの間は、という制限がつかますけれど」

静先輩の記憶では、この部屋を後にしたのが七時五分前後。警察が到着したのが七時十分過ぎ。そこからすぐに数名が屋上へ確認に行つたという事だから、多く見積もつても空白の時間は七・八分足らずだ。

こちらはこちらで検証する必要があるが、それよりも重要なのは先輩が屋上へ上る気配を捉えていないという事にある。

「静先輩。もう一度確認なんですけど、先輩は今日の六時半にここへ来たんですよね？」

「ええ。そうですわ」

「それでいて屋上へ誰かが行つたような気配もなかつたと今さつき説明しましたのに、と静先輩が少々唇を尖らせる。

「ここだ。もうこの時点でおかしい。」

「シロ。何か分つたみたいなの顔してるけどよ、何を確認してるんだ？」

首を傾げる宗也が急かすように質問を投げってくる。別に焦らしているわけではないんだけど。

ふと、僕はクロへと視線を向ける。彼女はその翡翠色の目をキラキラさせながら、僕の言葉を待っているようだった。

「いや、ただ単に、先輩が六時半にここに来て、奥山宏美が落下死するまで誰も屋上へ上っていないのなら、被害者と犯人は一体いつから屋上にいたんだろうって思っただけ」

あ、と静先輩と宗也が同時に言葉を漏らし、クロはパチパチと小さく手を叩く。

「そういえばそうですね。見ていないことに気を取られて、もっと初歩的な疑問を忘れてしまいましたわ」

「そうなる朝霧先輩の来た六時半から落下が目撃される六時五十分までの、最低でも二十四分間は犯人も被害者も屋上にいたってことになるよな」

そう。被害者と犯人は長時間屋上でともに時間を過ごしていることになる。

話し合いでもしていたのだろうか？ その果てに殺害を実行したのだろうか？

いや、これは場当たりのな犯行じゃない。遺書と靴のブラフを用意していた以上、計画的な犯行だ。

ならば、殺害するのはあの時間でなければならなかったのか？

でも、僕なら二十分以上も時間を設けようとは思わない。接触は限りなく最低限で済ませるべきだ。それが長ければ長いほど、予期せぬ事態が起こるのだから。

そもそも、何故犯人は被害者を屋上から突き落とす殺害方法を選んだのだろうか？ それも一つ間違えば殺し損なうようなりスクを負ってまで。

屋上から突き落とせば絶対に殺せると考えていたのだろうか？

否。さすがにそこまで楽観的はずがない。

だったら

「こうして考えてみると、気になるところばかりですわね。けれど、今日のところはこれで終わらせましょう。目ばしい関係者に話を聞きたいところですけど、警察の事情聴取が終わってからでも遅くありませんもの。少し、手を回しておきたい案件も出来てしまってますもの」

やや唐突に、静先輩が休止宣言を出した。思考に没頭していた僕は、その言葉ではっと我に返る。

「そつすね。いったん切って、明日改めて分るところ分らんところまとめた上で確認した方がいいと思いますよ」

いつの間にか固まっていたのだらう、宗也がゴキゴキとその太い首を鳴らして静先輩に同意する。

「に？ 今日はお終い？」

ちよこんとクロが首を傾げて僕を見る。そばに寄って頭を撫でてやると、クロはちよつと恥ずかしそうに、けれど嬉しそうにはにかんだ。

そんなクロを見ながら、けれど僕はまた別の思考へと旅立っている。

なるほど。これはもう確定的だ。細部が不明瞭なので説得力は欠片もないけど、誰がなんと言おうと、たとえどれだけの状況証拠が揃えられようとも、この事件は自殺じゃない。

誰かが奥山宏美を殺したのだ。学校の屋上から突き落として、殺したのだ。

何かしらのトリックを用いて周囲の目を欺き、不恰好な賭けに勝って、犯人はまんまと目的を達成した。

けれど、犯人にとっての誤算が二つある。

一つはクロがこの事件に興味を持ったという事。

一つは静先輩が今日の朝にここにいたという事。

だったらもう、やるしかないじゃないか。せつかく上手く行った犯人にはちよつと申し訳ないけれど、全て暴かせていただくとしよう。

僕は一度狙ったネズミを逃さない。

突いて叩いて追い立てて、僕のネコへと献上する。

僕の興味はそれをネコが喜ぶかどうか。それだけ。ネズミの末路に、興味はない。

ネコは狩りの前に爪を研ぐ。

次の日の朝六時ちょっと過ぎ。僕は何故か新聞部の部室にいた。そして、

「シロ君はコーヒの方がよかったですか？ でも、今は紅茶しかありません。アールグレイで手をつつてくれないかしら？」

目の前にはティーカップを差し出す静先輩がいる。何でだろう。何で僕はこんなに朝早くからこんな所にいるのだろう。眠い。すごく眠い。

「夜更かしをなさるからですわ。早寝早起きが人としての基本ですよ？」

「そーですなー」

生返事くらいしか返せない。今日だってまさか五時に着信で叩き起こされるとは思わなかった。洗濯物は干してきたが、朝食と弁当を用意する時間が取れなかったため、今日は朝も昼も外食になってしまう。

クロもまだ居間のソファで熟睡していた。起こすのも忍びなかったのでそのままにして出てきてしまったが、彼女の朝ごはんだけでも用意しておくべきだったかもしれない。

暴れなきゃいいけど。

ポーっとそんな事を考えているうちに、静先輩のティータイムが終わったようので、

「さて、朝早くにきてもらったのは他でもありませんわ。今の内に今日の行動を決めてしまおうと思ったからです」

ティーカップを机の上のソーサーに置きながら、静先輩はそんな話を切り出した。

「まずは今現在私の把握していることを全て説明いたしますわ」
すくつと立ち上がり、静先輩はきゆるきゆると音を立ててホワイ

トボードを引つ張ってくる。

僕の真正面にそれを配置すると、いつの間に用意していたのだろうか、数枚の写真を何処からか取り出してマグネットで貼り付けていく。

その数、七枚。女性六人と男性一人。結構な数だが、三枚ほど顔を知っているものが混じっていた。

静先輩はそのうちの一枚。童顔な少女の写真だけ左の方へよけて貼り付け、残りの六枚を右の方で組織図のような配列で貼り付けた。一番上に位置するのは、唯一の男性の写真だ。

「さて、準備はこんなところですね」

静先輩はさらりと写真の貼り付けられたホワイトボードを確認すると、僕の方へと向き直った。

「なんとなく想像がついているかもしれませんが、詳しく説明していきますわ」

シャキン、といつの間にか取り出していた指示棒を伸ばし、静先輩が童顔の少女の写真を示す。

「まずは今回の事件の目撃者ですわね。名前は平野明海^{ひらのあけみ}。一 A 在籍で、陸上部に所属してますわ」

知っている顔一枚目。僕と宗也のクラスメイトだ。

「他に目撃者はいないんですか？」

「ええ。屋上から転落する瞬間を見たのは、この平野明海だけです。他の方は全員、落ちた音しか聞いていませんわ」

目撃者はたったの一人。最優先で詳しい話を聞く必要があるだろう。逆に、彼女に関しては話を聞くまで手の出しようが無いとも言える。

静先輩も同じ考えを持っているのだろう。平野明海についてはそれ以上述べず、ボードの右側に貼り付けた六枚の写真の方へ視線を向ける。

「次に今回の事件の被害者、奥山宏美がこの方ですわ」

僕は静先輩の指示棒が示す写真を注視する。これと違って特徴は

ない、何処にでもいそうな女の子だ。写真の中の彼女はなんとなく睨んでいるようでちょっと怖い。

「そして彼女と交際関係にあったのが、この天夜彰あまやあきですわね」

指示棒が示すのは、一人だけ上に貼られた男性の写真。知っている顔二枚目。

僕たち一年生の数学の授業を担当しており、教え方も悪くない上に見た目がいいとかで女子からの人気は高い。

それに比例してなのか、男子からの人気はそれほどでもなかったと記憶している。

「あ、そうですね。ちなみに、この天夜先生と奥山宏美の交際関係はプラトニックなものではなくもっと肉体的で肉欲的な、いわゆるセック」

「あ、その辺は察しがつくので飛ばしてください」

「………………。つまりお二方はセツ」

「静先輩、何でそこまでして言及したいんですか？」

僕としては朝からエロトークなんて疲れることをしたくはない。

ただでさえ起き抜けの体は反応しやすいのだ。それをネタにいじられるのは死んでも御免だった。

「んもつ。シロ君は潔癖すぎませんか？ 人気のない朝の学校で美人の先輩と二人つきりなんて夢のような状況ですのに。健全な男の子に宿るリビドーのままに、目の前の果实を貪りたいとは思いませんの？」

静先輩が唇を尖らせる。

ああ、フグみたいに頬膨らませても無駄ですよ？ 可愛いんですけど。

「って、何でスカートをゆっくりたくし上げてるんですか!？」

「あら、見せて魅せるために決まっていますわ」

「…………いいから話を先に進めてください。朝の時間も無限じゃないんですから」

「それもそうですね」

比較的あっさりとして、静先輩はスカートから手を離し、艶かしくあらわになっていた太ももが布の向こうに消える。

「やれやれと、僕がちよつと気を抜いた瞬間、

「今日は黒のレースですわ。上下とも」

「図ったかのように静先輩がそう言った。

僕の中で、血が滾る。

くっ、瞬時にその形を想像してしまった自分が恨めしい。直前の張りのある太ももの映像とかけ合わさって、僕の体、主に下半身に血が巡ってしまう。

「が、うつむきつつどうにか惨事になる前にそれを鎮め、僕は小さく息を吐き出す。

ふと視線を感じて顔を上げれば、デジタルカメラを片手に持つ静先輩に出会った。

「あの、静先輩？」

「なんですの？」

「何、してるんですか？」

「私のシロ君コレクションに追加する動画を撮ってますわ」

「ああ、そうですか」

「もうやだこの先輩。」

「まあ、冗談は本当にここまでにしておきますわ。ともかく、この天夜先生は生徒に劣情を抱いていたようですね」

「まるで何事もなかったかのように説明の続きを始める静先輩にげんなりしつつ、僕は天夜先生の下に貼られた、奥山宏美以外の四名の写真へ視線を移す。

「天夜先生と今現在も付き合いのある方ですけど、まずはこの方ですわね」

「示されたのは、大きな眼鏡におさげ髪、やや伏目がちの少女だ。多分、一般的に地味と言われそうな感じの子だった。

「名前は金井昌子^{かないしやうこ}。一 C に在籍しておりますわ。部活動はやっていないようですが、放課後は図書室で司書教諭の仕事を手伝って

いるようですわね」

文学少女というやつだろうか。プロフィールを聞く限り、学校の先生とそういつた関係になることに抵抗感を示しそうな感じに思える。

「人は見かけにはよりませんわよ？ こういつた純情そうな方でも、何の拍子にどうなるかなんて分りませんもの」

言われてみればそれもそうだった。よく考えて見れば、僕の目の前にいる人も初見でその性格を見抜ける人はまずいないだろう。黙ってれば文句なく美人だと思っただけ。スタイルもいいし。

「別に、私もだれかれ構わず自分をさらけ出したりはしませんわよ？」

さようで。

「……まあ、いいですわ。金井昌子と奥山宏美の接触は数名の生徒に目撃されていますの」

やや不機嫌そうに静先輩は説明を続けていく。

「この接触で、奥山宏美が金井昌子を怒鳴りつけて泣かせたという事らしいですわ」

それはありえる話だと思った。金井昌子はおそらくそれほど気の強い性格をしてはいないだろう。奥山宏美に対すれば、萎縮してしまふ可能性が高い。

「その会話の内容は分るんですか？」

僕の問いに、静先輩は首を横に振った。

「会話の内容は直接本人に聞いてみるしかありませんわ」

「了解です」

会話の内容は間違いなく静先輩と同じ物だろうが、奥山宏美の行動は出来る限り洗っておく必要がある。その中から犯人に繋がる何かが見つかる可能性は大いにあるのだから。

「それと、事件当日のアリバイですけど、ご近所の方の証言によれば事件当日の朝はずいぶんと早く、朝の五時半に家を出たそうですわ。それ以降は八時半に登校するまで何処で何をしていたのか、

本人だけが知っていますわ」

犯行時刻と思われる時間にアリバイなし。なおかつその日に限って朝早くに出かけているとなると、ちょっと怪しいと言わざるを得ない。

話を聞くときは慎重に尋ねた方が良さそうだ。

「金井昌子の件はここまでとしまして、次は向坂さきさか絵梨ですわね」

静先輩が次に示した写真。そこには染めたとと思われる茶髪に派手な化粧を施した、いわゆるギャル系の女子生徒が写っている。

宗也が好ましくないといっていた部類の人だ。あいつの趣味に照らせば先の金井昌子の方が守備範囲だろう。

「在籍は三 B。あまり良い噂を聞かない方ですわ」

「と言うと？」

「飲酒喫煙を始め、万引きやら夜間徘徊やら援助交際やらと、おおよそ学校が素行不良認定するに躊躇いのない事柄がオンパレードですの」

もはやさして珍しくもないと言ってしまえるほどに聞き慣れてしまった言葉の数々。僕としては出来る限り関わりたくないタイプの人だ。

しかし、天夜先生の女性の趣味がまるで分からない。奥山宏美と金井昌子と向坂絵梨。三名の共通点なんて高校生というくらいではないだろうか。

「女子高生の制服が好きなようですよ？」

「今すぐ首にした方がいいんじゃないですか？ 実害出てますし」

頭が痛い。制服が好きだから高校教師になるなんて作り話ばかり思っていた。

「近年のニュースを見る限り、特に珍しくもありませんわ。それよりもこの方のケースですと、逆に奥山宏美に言い勝ったようですね」

向坂絵梨と奥山宏美の会話については断片的にだが証言があるようで、基本的には奥山宏美が一方的に罵りの言葉を口にし、その間

向坂絵梨は何処吹く風で聞き流していたようだ。

業を煮やした奥山宏美が平手を一発かまして、けれど向坂絵梨はやり返すでもなくただ鼻で笑ってその場を後にしたらしい。

素行はともかく、格好いい性格をしているようだ。

「いろいろ問題のある方ですけれど、女子生徒の人気は高いですね。昨年度のバレンタインデーでは二十個近いチョコをもらってましたわ」

「うちのクラスの男子が聞いたら泣き出しそうですね。って、ああそつえば三 B ってことは先輩のクラスメイトですか」

「ええ。ちよつとした交流程度しかありませんけれど」

それはどこか含みのある言い方だった。けれど、それに疑問を挟む前に静先輩が次の説明を始める。

「この方も犯行時刻にアリバイはありませんわ。お家の方はシロ君のお家と同じくめつたに帰っては来ないそうですから」

証言を期待出来るとすれば交友関係の中という事になるが、これに関しては静先輩が調べた上での結論だろう。

それにしても、昨日の今日でどうやってここまで情報を集めたのだろうか。

「昨今の情報社会では、言葉通り噂は千里を走りますのよ？」

先輩がちらりとスクリーンセーバーのかかったパソコンへ顔を向ける。

なるほど。文明の利器は使える人が使えばとんでもない実力を発揮できるらしい。

「さて、関係のある生徒としてはこの方で最後ですわ」

指示棒で示される写真には、釣り目気味で勝気そうなセミロングの少女が写っている。

「名前は飯島薫^{いじしまかおる}。二 A 在籍ですわ。ただ、この方は少々特殊ですわね」

「何がですか？」

「彼女は先の三人と違って、天夜先生と肉体関係にはありませんわ。

ずっと言い寄られ続けてはいようですけれど。奥山宏美に問われた時も、断固として否定したそうですわ」

写真から受けた第一印象はあながち間違っではないなさそうだ。しかし、断固として否定した部分が引つかかる。それでは言外に何かありましたと言っているように捉えられなくもない。

「ちよつと引つかかりますね」

「そうですね。でも、この方にはアリバイがありますの」

「え？ そうなんですか？」

僕の言葉に先輩はこくりと頷く。

「奥山宏美の落下が目撃された時間に、この方は学校近くのコンビニで雑誌を立ち読みしている姿が目撃されていますわ。そのまま雑誌をお買いになったみたいですし、問題の時間に学校外にいらっしやったのはほぼ確実ですわね」

状況的に見て完璧に近いアリバイだった。これだったら今回の調査から外してしまってもいいように思える。

「それはそうなのですけれど、何か引つかかりますの」

「まあ、気にはなりませんけれど」

多少でも疑わしければ調べて損はない、か。

思いのほか関係者が多い。調べるのは一苦労だろう。

……というか、静先輩なら後数日の内に全部調べ上げられるんじゃないだろうか？

僕の出る幕あるのかこれ？

「私もそう暇ではありませんのよ？ 今は別の案件を抱えていますの。私が手助けするのはここまでになりますわ」

「手助けというか、そもそもこれって先輩の依頼じゃありませんでしたっけ？」

「あら、シロ君はシロ君で調べるつもりだったのではなくて？」

「いや、そうですね」

「でしたら、残りはお願いたしますわ」

……うーん、確かに僕は僕で調べるつもりだったのだけれど、何

かこう釈然としない気もする。

「そんな事よりも、もうそろそろ時間もありませんわ。最後の一人の説明を致しますわよ」

先輩の指示棒が示す最後の一枚に写る人物。

それは僕の知っている顔三枚目。体育教諭の春霞はるがすみやえ八重先生だった。「何でここで春霞先生が出てくるんですか？」

「関係者だからに決まっていますわ。意外と知られていないみたいですけど、春霞先生は天夜先生の婚約者ですよ？」

「はい？」

初耳だった。意外と知られていないというか、多分ほとんどの人が知らないと思う。

「本人同士というよりは、お二方のお家関係の間柄のようすわね」

「え？ 春霞先生と天夜先生って、良家か何かの出なんですか？」

「そうですね。そのようなものですわ」

珍しく静先輩の歯切れが悪い。軽く唇を噛むその仕草は、前に先輩の家についてたずねたときにも見られたものだ。

あまり触れない方が賢明だろう。

「なるほど。それで、先生のアリバイはあるんですか？」

「ありますわ。春霞先生は直接の目撃者ではありませんけど、直前に目撃者の平野明海と会話をしていましたの」

目撃者と直前まで会話をしていたという事は、その時刻に先生もグラウンドにいたという事だ。

しかし、昨日柔道部に朝練習は無かったはずだ。練習があれば宗也が出ないはずはない。

では、何で先生はそんな時間に学校にいたのだろう？

「春霞先生は今宿直の当番をやっていますの。確か今日までのちょうど一週間のはずすわ」

「へえ。だとすると、見回りとかで朝とかに校舎の中を点検するはずですよ？ って、今日は大丈夫なんですか？」

「先ほど終わっていますから大丈夫ですわ。それと、昨日もこのく

らい、六時頃過ぎに見回りを行ったようですね」

六時頃となると、静先輩もまだきてはいない時間だ。

「ということは、その見回りで春霞先生が鍵を開けた際に、犯人と奥山宏美は校舎内に侵入したと見るべきですか？」

タイミング的にはここしかないはずだ。静先輩のように合鍵でも持っていれば話は別だが。

「その通りですわ」

「ですよ。でもそうす えっと、どっちがその通りなんですか？」

一瞬流しかけて、僕は思わず聞き返した。

「奥山宏美は学校の合鍵を持っていたんですの」

「え？」

驚く僕に構わず、静先輩はまたいつの間にか写真を一枚取り出していた。それをホワイトボードに貼るのではなく、僕に差し出してくる。

受け取った写真には一本の鍵と、それに付けられているデフォルメされたネコのキーホルダーが写っていた。

その鍵とキーホルダーに、僕は既視感を覚える。

「これ、先輩が持っていた奴じゃないですか？」

「違いますわよ。私のは、ほらこれですもの」

そう言っ取り出されたのは、写真と全くおなじ形の鍵と、デフォルメされた黒猫のキーホルダー。写真に写っているのは、デフォルメされたオレンジ色の猫のキーホルダーだった。

形は全く同じだが、その色が異なった。けれど、何故同じ型のキーホルダーが付けられているのだろう。

「天夜先生が女の子に配っているからですわ」

「……なるほど」

何というか、本当にあの数学教師は何を考えているのだろうか？

「目をつけた方にプレゼントして、それを使用している子に言い寄っていくようですね。一種のバロメーターとでも申しませうか」

「先輩のそれももらったんですか？」

「違いますわ。私はもらう前から自分で買った物を使っていたんですの。もらった物は捨ててしまいましたわ」

普通に既製品のようなだった。もしも特別なものなら何かしら手掛かりになったのかもしれないのだけれど。

「元々は携帯に取り付けていたんですけれど、勘違いした天夜先生が声をかけてくるのが億劫になってしまって、こちらに取り付けているだけですわ」

よりにもよって同じ色を渡されてしまいましたから、と溜息交じりに静先輩がその時のことを語る。

……それはさて置き、つまるところ奥山宏美は事件当日の昨日、宿直の春霞先生の目をごまかせれば、いくらでも学校の中に入る事が出来たという事になる。

この鍵の出所は何処なのだろうか？

「さあ？ 見当もつきませんわ。奥山宏美が私みたいに鍵の型取り用の粘土を持ち歩いているとも思えませんし」

さらりと静先輩が問題発言をする。

ああ、そのプラスチックケースみたいなものの中身はそういう用途の粘土なんですね。

「新聞部としての嗜みたしなですわよ？」

「断じてそんな事はないと思います」

本鍵の場所は十中八九職員室だが、生徒は簡単に入ることは出来ないし、そもそも鍵に直接触れるのは借りに行ったときくらいなものだ。

生徒が学校自体の鍵を借りれるはずもないのだから、それこそ何らかの隙をみて型を取りでもしない限り、複製品を手に入れることは難しい。

教員の協力があれば別だが、さすがに天夜先生でもそんな事までするとは思えない。

「そうですね。この鍵の出所は、この件でもかなり重要な部分に

なると思いますわ」

静先輩がそう締めたとところで、ふと部室の時計を確認すると、現在時刻は七時半を回ったところだった。

結構長々と会話していたらしい。

「現状分っているのはここまでですわ。後は、シロ君にお任せいたしますわ」

「さしあたって平野さんに話を聞くところからですかね」

静先輩によって相当量の下調べは終わっているものの、各自への個別調査はこれから始めなければならぬ。

長い一日になりそうだった。

ネコはネズミの巣を探す（一）

部室の後片付けをした後、まだ用事の残っているという静先輩と僕はその場で別れた。

時刻は、まだ八時にもならない。いつもならこれから身支度を整えて、登校の準備を始めようかという時間だ。

教室に行くにはいささか以上に早い時間だが、さりとして行くあてがあるわけでもなく、結局は大人しく自分の教室へと向かう。

春霞先生に話を聞きに行く事も考えたが、大人の事情が複雑な雰囲気だったので、まずは生徒達の証言を集めてから聞きに行くのが賢明だろう。婚約相手の浮気ことなんて、本当なら突っ込みたくない。

そんなことを考えながら、いつの間にか到着していた自分のクラスのス引き戸をスライドさせ、僕は誰もいないであろう教室に足を踏み入れ、固まった。

視線は、ただ一点。僕と教卓を挟んだ向こう側の窓辺に固定される。

そこでは一匹の黒ネコ、いや、黒をまとった少女が日向ぼっこをしている。

開け放たれた窓からそよ風が入り込み、少女の綺麗な黒髪をさらさらと撫でている。昨日と全く同じ出で立ちの少女　クロは、朝日を浴びてとても気持ちが良いように眠っている。

まるで、天に祝福されているかのような、幻想的な雰囲気があった。

たつぷり数十秒間はその光景に魅入った後、僕ははっと我に返り、ゆっくりとクロへと近づく。

どうやら窓際の机を四つほど密着させて横になるスペースを確保

しているようだった。しかし、小柄な彼女にとってもそれはあまり十分なスペースとは言い難く、体を小さく丸めている。

もっとも、彼女はこういう寝方をするので、特にこれが苦しいという事もないだろう。すやすやと幸せそうに眠る表情を見れば、そこに負の感情が混ざっていない事は容易に想像がつく。

でも、何故こんな時間にクロがここにいるのだろうか？

窓の壁に寄りかかる体勢で、彼女の頭をなでてやりながらそんなことを考えていると、

「……に」

「お……」

クロがうつすらと目を開けた。翡翠色の宝石が陽光を浴びて一際美しく映える。

むくりと身体を持ち上げ、ぼーっとした表情のままっーと首を巡らし、僕の方へ固定して止まった。

と思ったらそのままずっと顔を寄せてきたので、僕は思わず一歩下がろうとして、下がれなかった。

眼前、すぐそこに半目のクロがいる。もう少しでも近づかれたらいろいろと触れてしまう距離だ。僕はどうしようもなく、自分の顔が紅潮していくのがわかった。

じーっと、クロは半目のまま僕を見つめてくる。すでに一分は経過しているだろう。

……いや、これは見つめているんじゃないかと、睨んでいるのか？

最初は焦って落ち着いた状況判断が出来なかったが、これほど長く見つめられるのが寝ぼけという事はありえない。加えて、今になつてようやくどこか不機嫌な様子が見てとれた。

「えっと……」

何か言った方がいいだろうか？ そんな事を考えた直後、ぐう、と獣の唸り声のようなものが聞こえた。ちょうど、クロのお腹の辺りから。

「……もしかして、何も食べてないのか？」

僕の問いに、クロはコクリと頷く。しかし、半目でこちらを睨んだままだ。

「あー、えっと書置きを」

「ちよっと先輩に」

「えと、だ」

「ごめん。今度からちゃんと気をつける」

折れた。さすがに折れた。腹の虫を自由自在というのはどういう特技なのだろう。

「……ご飯」

ようやく顔を離してくれたクロが、とんでもなく不機嫌な声で要求を口にする。彼女にしてみればその要求は至極まっとうなものなのだが……

「そうしたいのは山々なんだけど、僕もまだ食べてないというか、材料も道具もここにはないわけ」

「ご飯」

「……いや、だから」

「ご飯」

まずい。また変なやり取りになりそうだ。しかもなんか徐々にクロの瞳が潤みを増してきている。泣くのか？ まさか泣くのか？

クロが泣いた姿を見た事が無い僕としては、一度くらいはそんな彼女の姿を見て見たいという嗜虐心が無いわけでもない。が、今後の関係を良好な状態にするためにも、それは避けておくべきだろう。となれば、

「分かった。さすがに僕が料理を作る時間はもうないけど、近くの店で何か買つかファミレスにでも入ろう。その代わり、何でも好きなもの注文していいし、買ってあげるから、ね？」

幼い子どもをあやすような言い方になってしまったが、若干すね

気味のクロにはちょうどいいだろう。

クロは表情を変えず、けれど黙ったまま僕の言葉を吟味しているようだった。

そして十数秒の黙考の後、

「うん」

コクリと頷き、顔を上げた時には不機嫌な半目ではなく、いつも通りのパツチリ開いた翡翠の双眸を僕へと向けていた。

「じゃ、時間も惜しいしさっさと行こうか」

「うん」

クロはいそいそと机からおり、ぱつと僕の腕に飛びついてくる。

「お、おい」

「えへへ」

すりすりとかクロが頭をこすり付けてくる。ご機嫌な時の彼女の仕草だ。動きに合わせて、チョーカーの銀鈴がチリリと音を奏でる。

やれやれと内心で溜息をつきつつ、僕はクロを伴って教室を出る。ホームルームの時間までには、何とか戻ってくるようにしないと。
な。

「それで、肝心要の平野は何処に行ったんだ？」

ざわついた教室内の喧騒に負けない程度の声量で、宗也が僕に尋ねてくる。

「分からないな。ちょうどいいから今聞いてしまおうと思ったんだけど」

僕は改めて今日室内をぐるりと見回す。

昨日に引き続き、今日も一時間目は自習になっていた。朝の連絡では次の二時間目を使って全校集会を開くようなので、その時に今回の事件について何かしらの説明があるのだろう。

事情のほとんどを聞いてしまった僕にとっては、ただ退屈なだけだ。

「ふうん？ ま、いいや、ちょっとくら聞いてくるぜ」

「あ、宗也」

僕の言葉にひらひらと肩ごしに手を振りつつ、宗也はつかつかと平野明海が所属している女子グループに声をかけに行ってしまった。まあ、僕が行くよりは宗也の方が変に身構える事無く話してくれそうではある。

ちらりと視線を送って様子を探ると、宗也は終始笑顔のまま二言三言の短い会話を終え、こちらへ戻ってくるころだった。残された女の子達がちょっとはしゃぎながらヒソヒソ話をしている。

「平野は今日、もう一回警察に寄ってからくるんだとき。タイミング的には多分、全校集会やってる頃になるんじゃないか？」
「なるほど」

ある意味で好都合だ。集会を抜け出して教室で張ってあれば、誰に聞かされがめられる事もなく話を聞けるかもしれない。

「一時間目の終了直前に保健室に行つて、その後で教室に戻ればいいか」

「んじゃあ、俺はその付き添いつて事でいけるな」

「は？」

「は？ じゃねえよ。俺にも話を聞かせろつての」

当然だろう？ と何故か自慢げに腕を組んだ宗也が言う。

当然という事はないと思うんだけど。

「まあまあいいじゃねーか。俺にも一枚噛ませるよ」

「一枚噛むつて、商売とかじゃないぞこれは」

「乗りかかった船だしいいじゃねーか」

乗りかかったというより無賃乗船に近い気がしないでもない。勝手に首を突っ込んできておいてよく言うものだ。

「何だかんだで役に立つぜ？ 俺はよ」

まあ、その点については否定しない。この風体に似合わぬ柔和な

笑みと外面の良さは、スポーツ大会のヒーローインタビューでも大活躍なのだ。

「ふう、分かった。けど、今回はいつになくやる気みたいだけど、何かあるのか？ 今回の件」

「……いんや？ ま、ちよつと個人的なものがあつたりなかつたりではあるんだけどな」

自然な動作で目を逸らした上、答えるまでに若干の間があつた。

静先輩といい宗也といい、痛い今回の事件に何かがあるというのだからうか？

大事じゃないことを祈るばかりだ。

「あ、ところでよ……黒猫ちゃんはどこいった？ 今日は学校についてきてるんじゃないのか？」

「ん？ ああ、クロならお腹一杯になつたらふらつとどこかに行っちゃつたな。多分、学校のどこかにはいると思うけど」

「本当に猫みたいな子だよな。しかし、あれで俺らよりずっと頭がいいんだってんだからなあ」

正しい意味で天才なのかね、と頭をかきながら宗也が呆れ半分の声で言う。

確かに世に言う天才には奇人変人と見られる人物が多いとは聞くが、クロの場合はそういつた次元のものではない気がする。

まあ、彼女の素性に関してはそのうち何かしらの関わり合いを持たざるを得ない時がくるだろう。今のような関係が続けていれば、いずれ。

「クロはとりあえず放っておいてもも平気だよ。一緒に話を聞いてくれれば心強かつたけど、まあいざとなれば僕の口から説明すればいいだけのことさ」

「そうだな。んじゃ、あと十分くらいしたら委員長に言つて、保健室に避難するとしますかね」

「ああ」

一度大きく身体を伸ばして、宗也はのしのと自分の席へ戻つて

いった。

それを見送って、僕は机の上につく伏す。

今日は朝が早すぎた。十分足らずではあるが、念のため仮眠を取っておく事にしよう。

今日はまだまだ、始まったばかりだから。

はたして、平野明海が誰もいない教室へとやって来たのは、全校集会が始まって十分後の事だった。

「あれ？ 春日野君たち、何で教室にいるの？ メールでこの時間は全校集会だつて聞いたんだけど」

身長は百六十に届くか届かないかだろう。陸上部だけあって無駄な肉付きのないすらっとした印象を受ける。そんなボブカットの童顔少女は、僕と宗也しかいない教室をぐるっと見回して、とても不思議そうに首を傾げた。

「よう平野。なんか大変だな。警察に寄つて来たんだろ？」

「え？ あ、うん。ほら、昨日の二年生の先輩のやつ、ね。なんか私しかその瞬間見てないとかでさ。どんな感じで落ちてたのかとかいろいろ聞かれてもう大変なの」

本当にもうサイアク、と鬱憤を吐き出す彼女は、とても普通だった。人の死を目撃したにしては、いささか明る過ぎる様に思える。

「平野さん。君、もしかして落ちる瞬間を見ただけで、死体とかは全然見てないのかい？」

「うん。そうだよ。だからかな。何かこう現実味がなくてさ。警察の人にも精神的なショックを心配されたんだけど、これがもうなーんにもないわけ」

ケラケラと笑う平野に、無理をしているような感じはない。彼女の日常の中にわずかに紛れ込んだ非日常。ただそれだけとして処理

されているのだろう。

彼女の精神状態が少々気にはなっていたが、この様子であれば細かく聞いたところで傷を抉るような形にはならないだろう。

「平野さん」

「何？」

「昨日の事件についてちょっと聞かせて欲しいんだ。ほら、新聞部の朝霧先輩に頼まれちゃってさ」

静先輩の名前を出すと、平野は納得したような、それでいて同情したような目を僕に向けて来た。なんだろう。憐れまれてる？

「いいよ。今から集会になんか参加したくないし、暇潰しになりそうだから」

「ありがとう。それじゃあ、そうだな、落下を目撃する少し前から話してもらえる？」

「うん。えっと、昨日は」

〈調査報告 その一 目撃者 平野明海の証言〉

早朝の町を、景気のいい掛け声と共に複数のジャージ姿の学生たちが列を成してかけていく。部活の早朝練習の前には、こうして学校外を軽く一周して体を温めるのが荒神高校の伝統だった。

軽いジヨギングのようなもので、朝のおしゃべりに花を咲かせる者達も多い。

平野明海も、そんな中の一人だった。

「ねえねえあけみっち、最近うちの学校に妙な噂うわさが立ってるの知ってる？」

「噂？」

隣に並んで走る友人からそんな話を聞かされ、明海は首を傾げる。全く聞いた覚えが無いからだ。

「何？ どんな噂なの？」

「それがね、どうにもうちの学校の屋上に、変な幽霊が出るって言うの」

「……幽霊？」

どんな噂なのかと期待した明海だが、幽霊と聞いて一気に興味が冷めてしまう。

明海はそういった超常現象を一切信じていなかった。特に理由はない。

そんな感情がもろに顔に出たのだろう。隣の友人がやや焦ったように、

「いやいや本当なんだつてば。なんかここ最近真夜中にどすんどすんって何かが落ちる音が聞こえるみたいなのよ。それで、気になった近所の人がうちの学校を外から見てたら」

友人はそこで一度言葉を切り、ごくりとつばを飲み込む。

「屋上から人影が落下したのを見ちゃったみたいなのよ」

「へえ？」

ありそうな展開に対して、明海は興味無さそうにそう返す。どうせなにかの見間違いだろうと、そう考えていた。

「でね、その人警察に通報して、現場を調べてもらったみたいなのよ」

なかなか思いきった事をする人だなと、明海は思った。もしも自分だったらそんな物は無視してしまうに違いない。

仮にそれが本当であったとしても、それは明海には何の関係もないのだから。気にする必要を彼女は感じない。

「それで、本当に誰か落ちてたの？」

「……あー、ううん。何も見つからなかったんだつてさ」

予想通りの答えが返ってきて、明海はふうと溜息を吐く。

「それじゃあ見間違いなんですよ？」

「うーん、そういう事になっちゃったみたいなんだけどさ。その落ちる影と音を見たり聞いたりしてるのって一人だけじゃないんだよね」

「他にもいるの？」

「うん」

複数名に目撃されているとなると、幽霊云々はともかくとしても何かありそうな雰囲気ではある。

「それでね、どうも荒神高校の屋上には昔自殺した生徒の幽霊が今も居着いているんじゃないかって噂になってるの」

「ふーん……」

どうにも後付っぽい話だったが、友人が熱心に語るものだから、明海は最低限の相槌を打って友人と話を合わせた。

そうこうしている内に荒神高校へと戻ってくる。

練習の前に再度柔軟体操をして、いよいよ各自の競技へと意識を向ける。

明海は走り高飛びを選択していた。小柄な彼女にはあまり向かない競技だが、好きなものは好きなのだから文句を言われても困るといのが本音だった。

機材を設置し、順番に練習を開始する。

そのまま数回飛ぶことにチャレンジしたところで、

「おー、やってるねえ学生諸君」

どこかのんびりした声が聞こえてきて、明海はその声のした方へ顔を向ける。

「春霞先生」

「よっす」

明海の視線の先、グラウンドへ降りるための階段の中腹には、学校指定のジャージをきた春霞八重がいた。

明海よりもさらに十センチも低い身長彼女は、その背に比例して顔立ちまでやたらと幼く感じる。

童顔であることに關しては明海も他人からよく指摘を受けるが、春霞八重のそれは超常現象を信じない明海をして、理解不能な存在といえた。

「平野、跳ぶ時に何考えてる？」

八重がテクテクと明海の方へ歩いてきながら、そんな質問を投げた。

「跳ぶ時、ですか。そうですね、バーを跳び越える自分をイメージしてます」

思い描くのはいつだって成功する自分自身。失敗を気にしながらでは成功するものも成功しない、というのが平野明海の信条だ。

「なるほどなるほど。それは確かにいい考えかただね」

うんうんと八重がその小さな両腕を組んで頷く。

明海はその可愛らしさに相手が先生であることも忘れ、思わずその頭を撫でたくなる。

「けど、どうせだったらもっと高くイメージしてみたらどう？」

「……高く、ですか？」

「そうそう」

八重は満足そうに頷き、ぴっと人差し指を立ててゆっくりと歩き始める。

「イメージってさ、限界を作るとそれ以上に出来ないのよ。だから、イメージには限界を設けちゃ駄目。高く跳びたいのなら」

八重が立っていた人差し指をそのまますつと空へと掲げる。

明海はその指を目で追って、大空の蒼に出会う。

「空、綺麗ですね」

「うむ。どうせならこの青い空に飛び込む気持ちで跳んでみたらどう？」

「……そうですね」

明海は視線を空から八重に戻し、

「もしかして、先生って意外とロマンチスト？」

「意外とって何よ意外とって」

八重がふくれっ面になる。確か今年で三十になるという話だったが、それでこれはどうなのかと明海は思わず笑ってしまう。

そうしてもう一度空を見ようと視線を上に向けて、異変に気が付いた。

「あれ？」

この位置からだど斜めになった校舎の屋上。何か一瞬黒い影が見えたと思った、次の瞬間、

「っ！」

明海は屋上から落下する制服姿の誰かを見て思わず息を呑んだ。

それは音も無く落下し、植木の向こうに見えなくなつた直後、どすん、と何か大きなものが落ちた音が聞こえてきた。

「ん？ 何かしら今の音」

大きな音に反応して、八重がきよろきよろと周囲を見回している。

だが、明海は今見た時分の光景が信じられなかつた。だがかるうじて、

「……ちた」

「え？」

「誰か、落ちた」

そんな言葉を発する事が出来た。

「え？ 落ちたって……、っ！ まさか」

明海の視線から類推したのだろう。八重はすぐさま身を翻し、校舎を下の階から確認するように首を動かしている。

「平野！ 落ちたのって屋上から！？ 何処に落ちた！？」

校舎の窓が何処も開いていない事実からの発言だろう。八重が明海の両腕を掴んで揺さぶってくる。

「あ、えと」

明海は改めて校舎の屋上を注視する。明海が影を見たあたり、その近くに最近壊れたばかりだというフェンスが見えた。

「多分、あの壊れたフェンスのところ」

すっと指をさす。八重がその先を視線で追って、弾かれた様に走

り出した。

「あ、先」

「消防に連絡して！」

思わずついて行こうとして、明海は八重の言葉に急停止する。

「そうだ、救急車！」

とつさにポケットを漁って、明海は携帯電話をベンチの鞆に入れっぱなしだという事に気が付いた。

「明海、どうしたの？　なんかさっき大きな音聞こえたあと八重先生が向こうに走って行っちゃったけど」

話しかけてきたのは、ランニングの時に噂の話をしてきた友人だった。

その顔を見て、明海は先ほどの話を思い出す。

屋上から落ちる影と落下音。

今まさに彼女が見たものだ。だとすれば、これも何かの見間違いではないか？

「そんな彼女のかすかな希望は、」

「きゃああああっ！！」

遠くで聞こえる誰かの悲鳴によって打ち砕かれた。

「　　ってところが私の知る全部かな」

ふう、と一息はいて、平野明海はカバンから取り出したペットボトルに口をつけた。

「なるほど。それで平野は死体を直接は見ていないのか」

「そそ。私の位置、というかグラウンドにいるとき、校舎の一階の窓下半分以上が植木に隠れて見えないのよね。だからそういったものは全然見れてないわけ」

そう言つて、平野は少し目を伏せる。

「見ちゃったのは他のクラスの子と春霞先生。春霞先生は覚悟して行つたみたいだけど、他のクラスの子は今日は休んでるってさ。結構、やばい光景だったみたいだから」

確かに何の覚悟も無く死体を目にした生徒は気の毒だろう。だが、僕の興味はそんなところではない。

「平野さん。その屋上に影を見たとき、近くにもう一つ影が見えたりしてない？」

「ああ、それ、警察でも聞かれた。けど、私が見たのはあくまでその死んじやつた人だけ。それももうほとんど落ちかけてるところからだから、全然」

平野がふるふると頭を振る。犯人の手掛かりになりそうな意見は聞けそうにもなかった。

「ま、そこはしょうがねえだろ。そう簡単になんでもかんでも分かりや苦労しないわな。けど、一個は分かったじゃねえか」

「ん？」

宗也の言葉に、僕が怪訝な表情になる。

「真つ直ぐ下に落ちたんだろ？ 平野」

「え？ う、うん。屋上からこう、すつと下に落ちてつた」

……ああ、なるほど、そっちの話か。確かに、真つ直ぐ下に落ちたのならやはり静先輩の証言と矛盾してしまう。静先輩が嘘を言っている可能性は限りなくないのから、どこかがおかしいはずだ。だが細かいところを考察するのは後回しだ。もう少しで集会も終わってしまうだろう。聞ける物は全部聞いておかなければならない。「そういえば、平野さん。その幽霊の話を知っているのは何組の人？」

「隣のC組の鈴木さん。そういつた噂話が大好きな子なの」

平野の話の中でちよつと気になる事を言っていた。後で話を聞きに行く必要がある。

「分かった。ありがとう平野さん」

「別にお礼を言われるようなことでもないでしょ。ま、どういたしまして」

これ以上は平野から得られる情報はない。

僕は平野の話してくれた内容を要点をまとめてノートに書き込んでいく。

まだ一人目だ。残りをどの順番であたってみるべきか。

僕は静先輩に教えてもらったそれぞれの人物の素性を改めて思い出すため、思考の海へと身を投じた。

ネコはネズミの巣を探す（二）

「であるからして、この解はこのようになる。ここはテストに出すぞ。応用が利くようにしておけよ」

教師の言葉を受け、それまで何処となく締まりのない雰囲気にかつていた教室内に、にわかにもメモを取り始める音が聞こえ始める。ちらりと時計を見れば、時刻はすでに十二時を少し回っていた。

昼休みは一時間しかないが、放課後の予定を考えた場合、この時間を使ってある人に話を聞きに行く必要があつた。

その人物は昼休みは決まって一人で学食に行くという事なので、僕も今日はそちらへ行くつもりだ。弁当を忘れた事は不幸中の幸いかもしれない。

そんなことを考えているうちに予鈴鳴り、

「よし、今日はここまで。復習しておけよ」

教師の言葉と共にガタガタと一斉に椅子を引いたり机を移動させたりする音が教室中を支配した。この一瞬の騒々しさはなんとも言い難い。

「シロ。今日は弁当ねーんだろ？ 学食か？」

「うん。ちよつと話を聞きたい人も行つてるみたいだからね」

「そつか。んじゃ、行くか」

宗也と連れ立って教室を出る。廊下はすでに購買へ向かう生徒や学食へ向かう生徒で溢れていた。

「席空いてつかこれ？」

「さあね。ま、行つてみないことにはなんともさ」

人の流れに沿って移動を開始し、目的地の食堂へと至る。券売機前にはすでに長蛇の列が出来ており、順番が回ってくるのは相当先

になりそうだった。

「参ったな。このままだと上手く会えるか分からないぞ。」

「食拳を買うことを放棄すれば今すぐにでも食堂内を探しにいけるが、物もなしでさりげなくお近づきになることは難しい。」

「さてどうしたものかと思案していると、」

「こ。シロ」

「いつの間にもやら気配もなく、僕の隣にクロがわいていた。いつものことなので特に驚きはしない。」

「やあ、クロ」

「お、黒猫ちゃんじゃねーの」

「に。お腹減った」

「クロがお腹を押さえて上目遣いにご飯を要求してくる。僕のお弁当が無いのだから当然クロのお弁当もない。」

「分かったよ。列に横入りは駄目だけど、僕がクロの分も食券を買うから」

「僕は指で列の先頭に存在する食券の販売機を示し、」

「あそこに書いてあるメニューから好きなものを選んでおいで………何でもいい？」

「うん。あ、日替わり定食ってのはその日その日で違っただけど、確か今日は………秋刀魚定食だね」

「それ！」

「ピンとクロが全身を伸ばし、首の鈴がチリンと大きめに鳴る。」

「本物のネコであれば尻尾が立っている状態だろうか。」

「クロは本当に秋刀魚好きだね」

「秋刀魚、美味しい。秋刀魚、美味しい」

「いや、それ意味同じじゃね？」

「宗也の突っ込みを無視して、クロはその場で両手を広げてくるくると嬉しそうに回っている。」

「作り物の尻尾とプリーツスカートの裾がふわりふわりと浮かび上がり、ニーソックスとの間でのぞかせる絶対領域に周囲の男子の目

が集中する。

気持ちには分かるが、何か面白くない。

……いや、これは使いようによっては時間が短縮できるかもしれないな。

「クロ」

「に？」

僕が呼びかけると、クロはピタリと動きを止め、すすつと近寄ってくる。

ちよいちよいと耳を貸せという合図を送ると、彼女は素直に顔を横に向けて耳を近づけてくる。

僕は周りに聞こえないようにクロにとある指示を与え、不思議そうな顔をする彼女に対して大きく頷いた。

「に。分かった」

クロが小さく頷き、再び嬉しそうにくるくると回り始める。

「おい。今何を言ったんだ？」

「見てれば分るよ」

怪訝な顔の宗也にそう答え、僕はちらりと周囲の男どもを観察する。

その視線の大半がクロに集中したところで、僕は軽くつま先を上げ、タタンと二階床を叩く。

「に」

それを合図にクロは突然回るのをやめ、その小さな手でスカートを押さえつつ恥ずかしそうにもじもじしたかと思うと、

「……えっち」

とても澄んだ声でそう言った。

「ぐはっ！」

「ぐおおおお！」

「衛生兵！ 衛生へぐふっ！」

「本部、本部応答せよ！ こちらの被害は甚大だ！ 野郎、とんでもない隠し玉を持ってやがった！」

「俺、もう死んでもいい……！」

「早まるな馬鹿！ 手刀で勿死ふんしなんて漫画の世界だ！」

僕と宗也の前で順番待ちをしていた列の中から、大勢の男子生徒がその場で崩れ去ったり誰かに引きずられて避難していった。

クロ効果で約八割の人間が脱落し、僕はそ知らぬ顔で誰もいなくなった空間を詰めていく。券売機はすでに目と鼻の先だ。

「クロ」

「に？」

再び呼びかけると、足元に転がる男どもを興味深そうに眺めていた彼女がテクテクと近づいてきた。

「よくやった」

「に。えらい？ えらい？」

「うん。えらいえらい」

めざましい戦果をあげた彼女の労をねぎらう意味で、僕はポンポンと頭を叩いてやる。

そうこうしている内に、自分の番手が回ってきた。

購入するのはクロの日替わり定食と、学食ではまだマシな味といえるアジフライ定食だ。

「宗也は何にするか決め」

券売機のボタンを押しつつ背後を振り返り、僕はそこに大柄な友人の姿が無いことに気がついた。

ふと遠くを見ると、未だに床に転がる男子生徒に混じって、宗也の大きな体もまた倒れ伏している事に気がついた。

……南無。

カウンターで料理の載ったお盆を受け取り、僕はざっと食堂全体

を見渡した。

先の脱落者の影響で席には若干の余裕がある。

だが、今は空席を捜しているわけではない。人がいる場所を重点的に探して、目的の人物を発見する。

隅っこの四人席を一人で占有しているセミロングの女性。飯島薫だ。呼び捨てはよくないから飯島先輩としておこう。

飯島先輩は遠めに見てもツンツンしたオーラがにじみ出ており、それによってなんとなく近寄り難い雰囲気形成されていた。

直接乗り込むのもいいが、出来ればファーストコンタクトはソフトな印象から入りたい。

「お……」

よくよく見れば、彼女が食べているのは日替わりの秋刀魚定食である。

ちょうどいいことに、こちらにも秋刀魚定食をじつと見つめるクロがいる。

「クロ。僕はちょっと水を取ってくるから、あそこの女の人がいる席でここいいですかって言うてきてくれるかい？　ちょっとこう、甘えるような感じで」

「に？　に……、うん。分かった」

トトツとクロが小走りに席へ向かって行った。

僕はしばらくその場で動向を観察することにする。

クロはお盆を机の上に乗せ、飯島先輩に身振り手振りを交えて話しかけた。ここいいですかの一言にどんな身振り手振りが必要なのかは分らない。

飯島先輩は突然珍妙な格好の女の子に話しかけられたことに啞然としていたが、次の瞬間には突然ツンツンした表情から柔和な笑みへと変わり、自分の隣の席を示してクロをそこに座らせた。

あれ？　なんかイメージと大分違う反応だぞ。

クロは促がされる我慢に席に着き、パンと両手を合わせて料理にお辞儀をして、箸を取らずに秋刀魚の尻尾を鷲掴みにした。そのま

ま上を向いて大きく口を開け、頭からもぐもぐとかじり始めてしま
う。

相変わらず豪快な食べ方だ。ゴミが出ない食べ方なので環境には
いいのかもしれないが。

つと、ここでいつまでも見ているわけにはいかない。さりげなく
僕も合流させていただくとしよう。

二つの水を確保し、僕は人を探しているふりをして目的場所の近
くへ寄って行く。

「あ、シロ。こっちこっち」

計算通り、クロが僕を見つけてぶんぶんと手を振ってくる。

時同じくして僕に気がついた飯島先輩がとたんに不機嫌な表情に
なるが、こんな事で怯むわけにも行かない。

「ああ、えつと、うちのがご迷惑おかけしてませんか？」

出来る限り笑顔を浮かべて、僕は飯島先輩に話しかけた。そして
堂々と料理の盆をテーブルに置き、椅子にも座ってしまう。

ここで座ってもいいですかとか、ご一緒してもよろしいですかと
かとは聞かない。そんな事しても断られるか失礼されてしまうに
決まっている。

「いいえ。……この子、君の妹さんか何か？ ずいぶんおかしな格
好させてるようだけど、まさか」

「ああ、いや、兄妹ってわけじゃないですよ。あとこの格好はこい
つの趣味で僕は関係ありません」

「に。シロが買ってくれた。嬉しいからこれ好き」

「買ってくれたって、それじゃあやっぱり……」

飯島先輩が汚物を見るような目で僕を睨む。うわ怖い。なまじス
タイルよさげで綺麗目なだけに怖い。

「買ってあげたのは確かですけど、選んだのは僕じゃないです」

「に。耳、可愛い。尻尾、面白い」

クロが帽子の耳と尻尾をてしてしと触って飯島先輩に示す。その
可愛さにあてられたのか、飯島先輩の表情が緩んだ。

なるほど。可愛い物好きな性格か。気持ちはよく分かる。

「あ、すみません自己紹介が遅れました。僕は一年の」

「シロ」

僕の言葉に被せてクロが名前ではなくあだ名を言う。そして次に自分を指して、

「クロ」

「シロ君に、クロちゃん？ おかしな組み合わせね」

ふふつと柔らかい笑みが飯島先輩の顔に浮かぶ。ツンツンした表情よりよっぽど魅力的だった。

「私は二年の飯島薫よ。よろしくね」

「どうも」

「に」

クロをだしにして正解だったようだ。すんなりと席に納まった僕は、他愛のない雑談でしばし場を和ませる。こういうのはタイミングが重要だ。

僕は飯島先輩の箸が鈍りだすタイミングを見計らって、

「あ、ところで飯島先輩。ちよつといいですか？」

本題を切り出した。

「何かしら？」

「うちのクラスの女子から聞いた話なんですけど、ほら、一年と二年の数学担当してる天夜先生いるじゃないですか」

僕がその名前を出した途端、飯島先輩の表情が凍りついた。それには気がつかない振りをして、僕は話を進めていく。

「なんかあの先生、いろんな女の子にちよつかい出してるって噂があるみたいなんですよ。それと関係あるのか分からないんですけど、昨日屋上から転落死した二年の先輩が天夜先生についてうちのクラスの子にわけの分からない質問したみたいなんですよね」

「そう、なの……」

飯島先輩は何かにおびえるように小刻みに震え、目があちらこちらへ泳いでいた。

怪しいにも程がある。

「で、後で聞いたら同じような目にあってる人結構いるらしくて、先輩とか大丈夫でした？ ほら、同じ学年ですし。何か」
「知らないわ！」

僕の言葉をかき消すように、飯島先輩が大きな声を出す。

驚いた周囲の視線が一気に集中するが、僕がぺこりと頭を下げるとそれらの視線はすぐに霧散していく。

「……えっと、僕何か変なことというか、気に障ること言っちゃいました？ そうならすみません」

なまじ内容が分っているだけに、白々しくならないように注意して謝罪の言葉を口にする。

すると飯島先輩は、はっと我に返り、

「え？ ああ、えっと、ごめんなさい。別に怒ったわけじゃないの。クロちゃんもごめんねと、飯島先輩は隣でキョトンとしている。口にも謝っている。」

なるほど。おそらく奥山宏美に問いただされた時もこんな反応を返したのだろう。これで何もなかったと思えというのは無理だ。

だが、本人の口を割らせるのは結構骨が折れるだろう。さてどうしたものかと思案していると、突然着メロが鳴り始めた。

「あ」

音に反応して、飯島先輩が慌てて携帯電話を取り出す。ジャラジヤラと多くのストラップやらキーホルダーが付いているが、あの猫のキーホルダーはくつついていなかった。

「あ、うん。分かった。それじゃあね」

飯島先輩は電話を切ると、

「ごめん。ちょっと呼ばれたから失礼するね。ばいばいクロちゃん。また一緒にご飯食べようね」

「に。分かった」

自分のお盆を手に、飯島先輩が席を立つ。

彼女は返却口にお盆を置くと、そのまま足早に食堂を出て行って

しまった。

初日の接触としては悪くは無かったと思う。ついでに、ちょっと気になる点も出てきた。おいおい調査していくことになるだろう。

「さて、と」

僕はさして食べていなかった自分のアジフライ定食に箸を伸ばそうとして、メインのアジのフライが半分ほど噛み千切られていることに気が付いた。

ずっと視線を送ると、クロはぶいっと僕から顔を逸らす。しかし、そのほっぺたが膨らみ、もくもくと何かを咀嚼しているのは丸分かりだった。

食い意地の張ってるやつめ。

「……ふう」

小さく溜息を吐き出し、僕は残り半分になったアジのフライをかじる。べちゃっとした衣は、揚げられてから時間が経過していることを物語っていた。

だから学食は嫌いだ。揚げ物は揚げたてに限る。

ネコはネズミの巣を探す（三）

一日の授業が終了し、それぞれに帰り支度やら部活の準備を始めるクラスメイトたちを尻目に、僕は手早く荷物をまとめて教室を後にする。

「こ」

教室を出てすぐに僕を待っていたクロと合流し、そのまま連れ立って歩き始める。目的地は図書室だ。

「ソウヤは？」

「あいつは部活があるからね」

夏の大会までさして日もない。軽薄そうに見えて、柔道に対しては一切の手を抜かないのが春日野宗也という男だ。大会の日には何か差し入れを持って行ってやるとしよう。

「に。ソウヤ、強い」

「そうだね」

「……シロ、強い？」

「うーん、宗也と比べられると困るかな。一応僕も護身術の心得はあるけど、倒すというよりは逃げるための使い方に重点を置いてるからね」

争いごとに対する僕の戦術は、相手の目的を達成させないという事にウェイトを置く。相手が僕を倒したいのなら、僕は全力で逃げればいい。それで僕は負けないし、相手も勝てない。相対的に僕の勝ちというわけだ。我ながらなんとも後ろ向きだけれど。

「でも、逃げてばかりではどうにも出来ないという事もあるのではなくて？」

背後から声をかけられ、僕とクロは同時に振り返り、

「静先輩」

「シズカ」

書類の束を抱えた静先輩を見つける。

「なんですかその書類」

「ちよつと図書室まで運んで欲しいと頼まれてしまいましたの」

「あ、先輩も図書室へ行くんですか？ なら半分持ちますよ」

言つて、僕は先輩の抱える束から半分強を受け取る。結構重い。

これの二倍量を抱えるとなると相当きついはずだ。

「ありがとうございますわ。シロ君」

「いえいえ、ついでですから」

僕とクロに先輩を加えて、三人で図書室へ向けて歩き出す。時折すれ違う生徒全員が振り返ったりヒソヒソ話を始めるのが聞こえるが、面倒なので無視した。

幸い僕自身が新聞部だから、妙なネタですつぱ抜かれる心配もないだろう。

「ところでシロ君。調査は順調ですか？」

「ええ、まあ。平野明海と飯島薫には話を聞きました」

「そう。では、今から行くのは金井昌子のところですか？」

「はい。放課後は図書室にいるんですよ？」

今朝聞いた限りでは、この時間は図書室で司書教諭の手伝いをしているはずだ。向坂絵梨は今日学校には来ていないようだったので、春霞先生を後に回すとなれば必然的に金井昌子という事になる。

「そのはずですよ。あ、そうそう、向坂さんですけど、先ほど見かけた方がいらつしやつたそうですよ」

「え？ 何処ですか？」

「ちよつと図書室方面だそうです。もしかしたら会えるかもしれませんわね」

静先輩の言う通り、ちよつど会えればそれに越した事はないが、実際のところは早々上手く行くものでもないだろうと僕は思った。た。

だから、図書室の近くまで来たとき、前方から歩いてくるのが向

坂絵梨だという事に気が付くのが遅れた。

「あら？ 向坂さんではありませんの？」

「え？」

静先輩の言葉で僕は立ち止まり、すぐそこで驚いたような表情をしている人が写真で見た向坂絵梨本人だと気が付いて、僕も驚いた。

「な、なんだ。朝霧か」

「ええ。……向坂さん、このようところで何をしていたらっしゃいますの？」

「……ふん。なんだっていいだろ。いちや悪いのかよ？」

最初の驚きからすぐに立ち直り、向坂絵梨 向坂先輩が不機嫌そうな顔で対応してくる。うん、どこか食堂の件とデジャブだ。この学校にはツンツンな女性が多いのだろうか。

制服の着くずし方といい、適度なアクセサリといい、派手さと大人っぽさの同居する魅力的な風貌をしている。あと、静先輩に負けず劣らずスタイルがいい。

「いいえ。ただ、今日は登校されていないものだと思ってましたから」

「ま、教室には行ってないな。行く意味もないし」

「まあ。私には会いに来てくださらないのかしら」

どこか寂しそうな感じで静先輩が身をよじる。

「気色悪い事言っただけじゃないよ。あんたへの頼み事はまだこっちの用意が出来てないっただけさ」

そんな静先輩を見て、向坂先輩は吐き捨てるように言葉を返した。ふむ。どうやら向坂先輩は静先輩に何事か依頼しているようだった。詳しいことは分からないが、先輩が新聞部の裏でなにかやっていることは知っている。それに関係することだろう。

「そうですね？ まあ、そちらは一通りの手はずは整えてますから、後はとても俗物的な問題だけですわね」

「……ちつ。分かってるよ。来週までには何とか出来る。それで文句はないだろう？」

痛いところを突かれたように向坂先輩が一瞬顔を歪ませたが、すぐに不機嫌な表情に戻る。

「ええ。クラスメイトのよしみで一応サービスさせていただいてますわ」

「ふん。サービスねえ。まあいいさ。それじゃあ、あたいは失礼するぜ」

言い捨てて、向坂先輩が僕らの横をすり抜けて行こうとしたので、

「あ、向坂さんあと少しよろしいかしら？」

「あん？」

僕が何か言うよりも早く、静先輩が向坂先輩を呼び止めた。

「昨日亡くなった、二年生の奥山宏美さんという方を覚えてらして？」

「奥山？ ……ああ、あのへんてこな女か。へえ、昨日死んだのそいつなのか。いい気味だな」

先ほどまでの不機嫌さがまるで嘘のように、向坂先輩はいやらしい笑みを浮かべてニヤニヤとしている。

憎い相手が痛い目を見た時、ちょうどこんな表情になるだろうか。

「あら？ ずいぶんと愉快そうな顔ですね」

「そうかい？ まあ、そうなんだろうな。あの女、変な言いがかりつけてしょ ……ああ、そう、変な言いがかりつけてあたいに食

ってかかって来やがってさ」

今、何か言いかけて飲み込んだ。文脈的に人の名前が続きそうな雰囲気だったと思う。

「拳句の果てには平手までくれたんだぜ？ もう馬鹿らしくて鼻で笑って無視してやったけどな。その時のあいつの惨めな顔は傑作だったぜ。後になってやっぱ殴っとくべきだったか持って思ったけど、死んじまつたんなら別にいいや」

静先輩の言う通り、向坂先輩は愉快そうに、愉快でたまらないというような感じで、奥山宏美の死を嘲笑った。その姿に、僕は背筋がゾクリとなる。

「そつかそつか死んだか。うん、いいね。うん、手間が省けた」
「え？」

向坂先輩の言葉に、僕は思わず声を出す。すると、向坂先輩の視線が僕の方へ向き、わずかに目を見張ったような気がした。

まるで、今になってようやく僕の存在に気がついたみたいだった。

「朝霧、あんたの隣にいるのは誰だ？」

「私の後輩ですわ。シロ君、といいますの」

「……………そうかい」

じろじろと無遠慮に僕を上から下までねめつけると、向坂先輩はふんと鼻を鳴らした。

どうにも不思議な感じだ。見ているのに見られていないというか、なんとさえいいのだろう。

「あんまりこの件に深入りしない方が身の為だと思っぜ？ お二人さん」

向坂先輩は僕に向かってそんな脅迫めいた忠告をしてきた。途端、終始黙って隣にいたクロが僕の制服の裾をつまんでくる。

どうかしたのかとクロを見れば、翡翠の瞳をパツチリと開いて向坂先輩を観察しているようだった。

「さて、もう用はないよな？ じゃあ、あたいは失礼するぜ」

ひらひらと手を振って、向坂先輩は歩き去る。

予定外ではあったが、捜すのにもっとも手間取るであろう人物と出会えたのは幸運だった。静先輩も一緒にいたことで、必要以上の情報が手に入った。

「さて、私たちも参りましょうか。図書室はもうすぐそこですわ」

「そうですね」

僕は形が崩れかけてきた書類の束を持ち直し、一步目を踏み出そうとして、制服が引っ張られる感覚に足を止めた。

「シロ君？」

「あ、すいません。っと、クロ？ どうしたんだ？ 行くよ」

僕の裾を掴んだまま向坂先輩の歩き去った方向を見つめるクロに

呼びかけるが、返事はない。小さく嘆息しつつ、再度呼びかけようとして、

「シズカ」

振り返らずに発せられたクロの言葉に、僕は自分の声を飲み込んだ。

「何ですか？」

シズカ先輩が首を傾げてクロに答える。

クロはようやくゆっくりとこちらに振り返り、

「あの人、面白い。すごく、面白い」

何か驚いたような表情のまま、嬉しそうな弾んだ声でそう言った。僕もあまり見たことが無い類の表情だった。興奮している状態、なのだろうか。

「そうですね？ 確かに、ごく普通の方とは違いますけれど」

「に。絶対面白い。絶対」

そう言うと、クロは僕の制服から手を離して、スキップするように廊下を進み始めた。チリンチリンと持ち主の感情を表すように、首もとの銀鈴が音を奏でる。

僕と静先輩は顔を見合わせ、二人そろって首を傾げた。

ネコはネズミの巣を探す(四)

図書室そのものというよりは、実は隣接する図書準備室に用があるという静先輩と別れ、僕とクロは二人で図書室に足を踏み入れた。試験に向けての準備だろうか。教科書やら参考書を広げている生徒がちらほらと見受けられる。

試験勉強とくれば図書室籠りというのも定番過ぎて面白味が無い。……ところで、明らかに勉強に来てもないし本を読み似ているわけでも無さそうな男子生徒のグループが複数存在するのが気になる。こういう場所縁が無さそうな連中に見えるのだけど、はてさて？

そんな違和感を覚えながらも、とりあえず僕は目当ての人物を探す。予定通りなら貸し出しカウンターにいそうなものだったが、出入り口からすぐのそこには別の女子生徒がいるだけで、金井昌子の姿がなかった。

さてさて……ん？

ぐるりと図書室の中を見渡して、僕はさらなる違和感に気が付いた。先の縁遠い男子グループが、それぞれヒソヒソと会話しつつもそろって同じ方向へ視線を向けていたからだ。

ちょうど僕のいる位置からは刺客になる方向なので、そこが見える位置まで移動してみると、

……ふむ。

はたしてそこには本棚の前で背伸びをしている金井昌子がいた。眼鏡におさげ髪という写真そのままの出で立ちだ。

どうも返却された本を棚に戻している最中らしい。小柄な彼女にとっては棚の最上段はギリギリ届くか届かないかという微妙な高さになっていた。

台を使えばいいと思うのだが、一生懸命になりすぎて回りが見え

ていないのだろう。たまにぴよんぴよん跳ねているのがちょっと可愛い。

そして、彼女が跳ねるたびに写真では分らなかったその豊満な胸が激しく揺れるのが刺激的に過ぎた。

なるほど。先の男子連中はこれが目当てという事なのだろう。今日会った女性の中でダントツにでかい。そちらの好事家にとっては垂涎の代物だ。静先輩をグレイプフルーツとするならこちらはメロンドだろうか。

ちらりと隣のク口を盗み見ると、何か珍しい物を見るように小さく視線が上下していた。彼女自身は持っていないそれに興味津々といったところか。

宗也あたりならこのまま観察し続けるのも悪くないと言い出しそうだが、そういうわけにも行かない。僕は堂々と金井昌子に近づき、「あの、すみません」

ようやく本を棚に押し込んだ彼女に声をかけた。

「え？ あ、はい。何でしょうか？」

金井は物怖じせずにはきはきとした口調で答えてくる。どこか引込み思案な性格を想像していたが、ただの偏見だったようだ。

しかし、そうなると思山宏美に怒鳴られて泣かされたという話はどういう事になるのだろうか？

「えっと、ちょっと聞きたい事があるんだけど。少し、時間とれなかな？」

「聞きたいこと、ですか？ えっと」

不思議そうに首を傾げた彼女の視線が横にずれ、僕の隣にいるク口へ向く。

「ああ、その子と一緒にっていう事は、貴方がA組のシロさん、でよかったですか？」

「え？ ああ、うん。へえ、そう伝わってるんだ」

「ええ。A組に猫のコスプレをさせた女の子を飼っている男子生徒がいるって、結構噂なんですよ？」

「何かそこだけ聞くと、僕がそつち系の変態か何かに聞こえるんだけど……」

何故誰も彼もクロの格好が僕の趣味という認識をしているのだろうか。断じて違う。良く似合ってるし可愛いと思うけど、別に強制はしていない。

「違うんですか？」

「違う。ってか、仮に僕がそういう変態だったとして、何で普通に対応してるの？」

「私、趣味は人それぞれだと思ってますから。自分自身にそういう事を押し付けられでもない限り、嫌悪する意味が無いと思いません？」

さも当然の事のように、金井昌子が持論を述べる。珍しいもの考え方をする相手だった。

「とまあそんな話はさて置き、何か聞きたい事があるんですけどっけ？」

「ああ、そうそう。えっと、昨日亡くなった二年の奥山宏美……さんって覚えてる？」

奥山宏美の名前を出した途端、どちらかといえばにこやかだったはずの金井昌子の顔に嫌悪の色が混ざった。しかしそれは一瞬の事で、次の瞬間には元に戻ってしまう。

「ええ。今日の集会で死んだと聞かされて驚きました」

「自分に食って掛かってきた相手だから？」

「……………その事って、もしかして噂か何かになってます？」

底冷えするような声だった。先ほどまでの当たり障りのない雰囲気はどこかに消し飛び、周囲の気温が低下したような錯覚を覚える。表情に変化はない。けれど、確実な変化が起きていた。

「いや、まだ噂にはなっていないと思うよ。言い忘れてたけど、僕は新聞部でね。亡くなった奥山先輩の関係者にいろいろ話を聞いているんだ。奥山先輩、亡くなるちょっと前に色んな人と会ってたみたいで、これが結構大変なんだ」

僕はその変化に気が付いている事を悟らせないよう、あえてそのままの状態を話を進めた。変化に気がつかない鈍い相手だと思ってくれれば最良だ。

「ふーん。そうなんだ。うん、確かに奥山先輩は私の所に来たよ。それで変な言いがかり付けられちゃって、普通に相手をしてても面倒な事になりそうだったから、ちょっと気弱で泣き虫な演技をして帰ってもらったの。それ以降は全然会ってないかな」

「何て言われたの？」

「えっと、何だったかな。確か『あの人と付き合ってるのか？』だったかな。いきなりで何の事かさっぱりだったけど」

雰囲気そのままに、金井昌子が淀みなく答える。この受け答えの中に嘘が混じっているような気配はない。ただ、嘘が混じってないだけでおそらく隠している事、こちらに言っていない事はありそうだ。

「やっぱり、みんな同じ質問をされてるんだな。でも、あの人って言うのが誰か分からないんだよね。金井さん、心当たりない？」

ひとまず僕の口から天夜先生の名前を出すのは避けておく。常識的に考えて、今この状態でその関係性を僕が知っているのは恐ろしく奇妙に映るだろう。

下手に警戒を強められるのは面倒だ。

「うっん。全然ない」

金井昌子がぶんぶんと言葉を横に振った。

「だって私、付き合っている男の人はいないもの」

「なるほど。それは確かに分からないね」

僕は頷いて相手に同意する。

その後二、三のあたり障りのない質問をして、

「あ、そういえば」

僕はちよつと思いついたというように、

「金井さん、朝は五時くらいに家出るの？」

さりげなく、流すように質問する。

「……えっと、どういう、こと？」

金井昌子は受け流そうとして、若干失敗している。わずかに、口元が引きつっていた。

「昨日の朝五時に金井さんが家を出るのを見たって人がいてさ。ずいぶん朝早くに家を出るんだなと思って。家は学校から二十分くらいなんでしょ？　いくらなんでも早過ぎないかなって思ったわけ。事件当日の足取り。あまりにも早くに家を出たのにはそれなりの理由が伴うはずだ。例えば、誰かを殺したりとか。

ここで金井昌子がどういうごまかしをするのか。そこが重要なポイントだ。

「……あ、えっと、私ね、朝は散歩してから学校に行くの」

わずかな逡巡のあと、彼女の口から出たのはそんな言葉だった。

「散歩？」

「うん。私の家犬を飼っていたんだけど、つい最近死んじゃってさ。まだ習慣で散歩の時間に目が覚めちゃうから、運動がてらにちよつと、ね」

ふと、寂しそうに目を伏せる。まるで本当に愛犬のことを思い出して感傷に浸っているようだ。

実際、周囲から僕に来ていた視線が一気に鋭くなった気がする。状況を見て僕が金井昌子の表情を翳らせたようにしか見えないのだから当然だった。

強かに役者だね、これは。

けど、散歩をしたたという事ではアリバイ証明にはならない。犯人扱いをしたわけではないからそれは当然なのかもしれないが、下手な嘘は後で矛盾を生む。

となれば、この嘘は事件とは関係のない、他の何かを隠すための嘘だ。

彼女は事件の日の早朝、いったい何をしていたのだろうか？

「どうしたの？」

「え？」

いけないいけない。また思考に没頭してしまっていた。僕は頭を振って、

「ご、ごめん。なんか嫌なこと思いださせちゃったね」

「あ、ううん。いいの。嫌って言うより、ちよっと悲しいだけだから」

目じりに溜まっていた涙を手で拭い、金井昌子はまたにこやかな笑みを作った。事情を知っていなければその健気な態度に好感以外は持たないだろう。

「えっと、話はそれで終わり？」

「ああ、うん。ありがと。助かった」

「どういたしまして。それじゃ、私まだ仕事があるから」

そう言って仕事に戻ろうとした金井昌子を、

「に」

「え？」

クロが制服の裾をつまんで引き止めた。

「えっと、何かしら？」

少し戸惑った表情で、金井昌子がクロに尋ねる。しかしクロはそれには答えず、

「わ……」

突然金井昌子にずいっと近づき、スンスンと匂いを嗅いだかと思うと、ぺたりと自分の頬を相手の頬に密着させてすりすり頬ずりを始めた。

「え？ え？」

わけもわからず疑問符を点灯させる金井昌子には構わず、クロはしばらく頬ずりをし続ける。

その仕草は、クロが公園で遊ぶ時に動物や幼稚園児くらいの小さな子供によくやる行為だ。ませた男の子の中にはそれ目当てで足繁く公園に通ってる輩もいる。

「それって、私が小さい子供だと思われてるって事ですか？」

「いや、それはないと思うんだけど」

いくら小柄とはいえ、金井昌子はクロよりもやや背が高いし、そこまで童顔ではない。となれば、いったいどういう事なのだろうか。僕自身もクロの行動を図りかねているうちに、彼女は唐突に頬ずりを止め、最後にペロリと相手の頬を舐めてそのそばを離れた。

「えっと……」

相変わらず疑問符を点灯させ続ける金井昌子に対し、クロはにっこりと笑みを作って、

「まだ出来ないから、その代わり」

そう言った。全くもって意味が分からない。

「ああ、ごめん金井さん。こいつ時々こうや　金井さん？」

意味不明な行動について謝ろうとして、僕は金井昌子の表情が驚きに染まり、化け物でも見るような目でクロを見ている事に気が付いた。

え？

その様子に驚き、僕が何かと尋ねようとしたところで、

「金井さん。ちょっと貸し出し多くなってきたからカウンター手伝ってー」

いつの間にか男子生徒の長蛇の列が出来ていた貸し出しカウンターの女子生徒から、ヘルプの要請が飛んでくる。

「わ、分かった。すぐ行く。えっと、ちょっと忙しくなっちゃったからこれで」

これ幸いとばかりに、金井昌子は逃げるようにして貸し出しカウンターへ向かっていった。その姿を視線で追うと、カウンターに並ぶ男子生徒が僕の方へ嘲りの視線を向けていることに気が付く。

……なるほど。連中の目的である金井昌子観察を長時間僕が邪魔した腹いせというわけだ。余計な事をしてくれる。

けど、おおよそ話は聞いたし、前情報に誤りがあることも分かった。どこかでもう一度情報を整理した方がいいだろう。

僕は隣でニコニコしているクロを見る。

僕はまだ分からないが、クロは金井昌子に関して何かを掴んだ。

そしてそれは彼女にとって知られたいものでは無かったのだろう。

今この場で何を掴んだのか聞いてもいいが、今は注目を集めすぎている。あとで静先輩に報告する時にでも確認すればいいだろう。

そう結論付け、僕はクロを連れて図書室を出る。

その過程で貸し出しカウンターの前を通る際、背中に痛いほど視線を感じ、その内の一つが氷のように冷たかったのが分かったが、振り返りはしなかった。

何かいろいろと、さらに面倒な事になりそうだ。

ネコはネズミの巣を探す(五)

「春ちゃんならさつき用事があるってどっか行ったぞ？」

図書室を出て一路武道場へ足を運んだ僕とクロは、柔道着姿でタオルを首から引っ掛けたまま出迎えてくれた宗也から春霞先生が不在である事を告げられた。

「そっか。うーん、タイミングはずしたな」

「ま、しゃーねーだろ。ところで、ちつとは進展してんのか？」

ゴシゴシと顔の汗を拭きながら宗也が尋ねてくる。むっと汗の臭いが広がり、隣にいたクロがささつと僕の陰に隠れた。

「まあね。ちよつと前情報と違う部分も出てきたから、整理しないといけないけど」

「ふーん？　じゃ、ちようどいいじゃねーか。整理しながら俺に聞かせろよ」

「あー……まあ、いいか」

宗也の弁では春霞先生もいずれ戻ってくるという事なので、暇潰しもかねて今日一日の事を宗也に話す事にした。

事実確認と新たに生じた疑問点。各々に何かしら裏がありそうな言動。そして奥山宏美に対する態度等。

「とまあ、こんな感じだな」

一通り説明すると、宗也は片手で顎の辺りをさすりながら、

「んー。聞いた感じだと、金井昌子が一番怪しそうってところか？」

「ま、そう考えるよね。結構女優みたいだし。けど、なんか金井昌子じゃないような気がするんだよね」

「そうは言うが、事件の日の早朝に普段とは違う行動を取ってるんだろ？　偶然っていやあそれまでだろうけどよ」

事件当日に限って朝早くに家を出たこと言っているようだ。確かに、朝の五時に金井昌子の家を出れば、犯行時刻よりずっと前に現場へ行くことが出来る。

「確かに早朝の行動は気になるよ。突っ込み入れた時にそれなりの反応もあったし。けど、彼女は別の事にも反応してたんだよね」

「ああ、黒猫ちゃんが言ったことだろ？」

「に？」

宗也に視線を向けられ、クロがピクンと反応を示す。そつと宗也がクロへ向けて手を伸ばしたが、クロはささつとその手の届かない範囲へ逃げてしまう。

彼女は男の汗の臭いが好きではないので、シャワーでも浴びない限りは触らせてもらえないだろう。

「黒猫ちゃんにはまだ聞いてないのか？」

そつとは知らずにちよつと傷付いた表情を浮かべながら、宗谷が質問してきた。

「うん。出来れば新聞部の部室で聞こうと思ってるんだ。人目を避けておきたいし、クロもその件については聞かれるまで答えるつもりがないみたいだから」

「そつか。ならそつした方がいいだろうな」

「うん。……で、逆に一番候補から外せるのが向坂絵梨だと思う」

彼女と話をした限り、僕は奥山宏美の件に関しては無関係の可能性が高いと踏んでいる。

「ま、本心かどうかは別として『手間が省けた』なんて台詞は自分ではない誰かのおかげって言うてるようなもんだしな。それが計算の上でっつてんなら話は別だが、違うんだろ？」

「感覚的なものでしかないけど、あれは思わず言った言葉だと思うから、自分で自分に暗示をかける勢いでなければあそこまで自然には出てこないと思うよ。それはそれで問題だとは思っけど」

「いずれは何かするつもりだったって事だもんな。しっかしまあ、ずいぶんと恨み買ってんだな今回死んだ人」

がしがしと頭をかきながら、宗谷が溜息混じりに言う

「会う人会う人に嫌悪感を示される人も珍しいね」

それに関しては僕も全面的に同意せざるを得ない。話を聞けば聞くほど、奥山博美はおかしな人物だ。

何が彼女をそこまでの存在にしたのか。今となっては分からない。死者は語る口を持たない。語る事が出来るのは生者だが、生者は他者の本質を語れない。

主観と感情に塗れたものでは、本質を探る事など出来はしない。

「そんな彼女が執心していたのが天夜先生なわけだけど、はてさてどういう経緯でそういう関係になったのか」

「普通に声かけたんじゃないの？　なんか黙ってれば結構イイ女だったらしいぜ。胸も大きかったって話しだしな」

「ん？　宗也、奥山宏美もグラマラスだったって事？」

「ああ。二年の先輩が惜しい身体を亡くしたとか言ってたぞ？　つてか、奥山宏美『も』ってなんだよ『も』つて」

「いや、飯島薫も向坂絵梨も金井昌子も、そういった意味ではすごく女性的な体付きしてる……んだけど……？」

自分で言つて、はたと気が付いた。天夜先生が関係を持ったといわれている人物は、その全てがグラマラスな体をしている。考えてみれば、突っぱねた静先輩だってそうだ。

つまりは

「天夜先生は巨乳フェチつてことだな」

「……なあ宗也。教育委員会の電話番号つて何番だっけ？」

「えーつと××××××」

「××××××よ」

「「うおお！」」

突然会話に乱入してきた声に、僕と宗也は文字通り飛び上がる。すぐさま弾かれたバネの勢いで振り返ると、

「に」

「やあやあクロちゃんじゃないか。久しぶりだね」

ただ一人、クロだけが何事もなかったかのように手を挙げて乱入者を迎え、頭をナデナデされていた。

クロの頭を撫でているのは、小柄な彼女よりもさらに小柄な、

「は、春霞先生いつからそこに？」

学校指定のジャージを着込んだ、小学生と言われても信じれるほどの容姿をした体育教師。春霞八重先生がいた。

「いつからって、まさに今よ？ 何かシロっちと宗やんがヒソヒソと怪しかったから、気配消して近づいてみました」

くつくつくと喉の奥で笑うような声を出して、春霞先生が歯を見せて笑う。その名前を表すように尖った八重歯がキラリと光り、僕は意味も無く寒気を覚えた。

「学校の中で気配消して行動しないで下さい。心臓に悪いですよ」
「あら、クロちゃんはずぐに気が付いてたわよ？」

言って、春霞先生が子供がそうするように『ねー』と同意を求めると、クロもまた『にー』と調子を合わせていた。

クロを基準にしないで欲しい。

「まあそれはそれとして、本当に何をヒソヒソと話していたのかしら？」

「え？ あ、えっと、ちょっと昨日の事件に関して調査を。新聞部として」

「……そう」

それまでのニコニコした表情が一転、辛さを噛み締める様に沈んだ表情となる。

「春霞先生。先生は、昨日事件があったときグラウンドで平野さんと話してたんですね？」

「え？ ああ、うん。一生懸命練習してたからさ。競技は違うんだけど昔の自分を思い出しちゃって」

どこか遠くを見るように、春霞先生の視線が僕から外れ、すぐに戻って来た。

「ほら、平野って私ほどじゃないけど背が低いほうでしょ？ けど

競技は走り高飛びだから、どうしても身長差っていう壁があるのよ」
確かに、平野明海の身長は高くない。そういえば、走り高跳びは身長が高い方が有利なんだと聞いた事がある。高いものを飛び越えるのだから当然といえば当然だ。

「でも、そんな事に限界を感じちゃったら跳べないのよ。だから」

「ずっと、春霞先生は人差し指を立てて頭上へ伸ばした。釣られて僕も宗也も上を見上げ、武道場の天井眺める。」

「ここじゃ見えないけど、空へ飛び込む気持ちで跳んで見ればって言ったわけ。……どう？ いい話じゃない？」

にひひと悪戯少女のように春霞先生が笑う。

そういう事は自分で言っちゃ駄目だと思っんですけどね。

「なによー。ぶーぶー」

ぶくつと頬を膨らませるさまは、思わず頭を撫でたくなる。けれど、僕はそんな愚行は犯さない。そんな事をしたやつがどうなったのか、嫌というほど見ているのだ。

「ま、でもそんな時だったのよね。平野が上を向いて、おや？ って顔したかと思ったら、急に息を呑んでさ。次の言葉が『落ちた』だったんだよね」

何処かばつが悪そうに、春霞先生は再び僕から視線を逸らした。

「最初全く分からなかったんだけど、平野が屋上見てるのが分かってピンときたわけ」

視線を逸らしたまま、春霞先生は話を進めていく。

「あの場所ってグラウンドから植木のせいで死角だし、校舎の向こうの端からじゃないと回って来れないへんてこな植え方されてるじゃない？ だから全速力で回り込んだんだけど、一步遅くて生徒が先に見ちゃったのよね」

失敗失敗と、春霞先生はちょっとドジってしまいましたという感じで、ペロリと舌を見せた。

「いやー、それ以上目に入らないように視界塞いだんだけど、腰抜

かしてくれてなかったら頭抱えてやることなんて出来なかったわ。
うん。なだめるのすっげ大変だった」

腕を組みながらしみじみとうんうん頷く先生のそういう仕草は、
とても可愛らしい。そう、こんな話をしている最中でも。

「死体の方は確認しなかったんですか？」

「何を？」

何の事を言っているのか分からない。首を傾げる春霞先生の表情
は、それを雄弁に語っている。

「いや、まだ生きてるかどうかとか」

「生きてたら死体って言わなくない？」

「……そうですね。僕が言い方を間違えました。じゃあ、改めて。

屋上から落ちた奥山先輩の生死を確認しなかったんですか？」

「ああ。うーん、パツと見ピクリとも動かないし頭がち割れて中身
出かかってたし、即死だと思ったんだよね。だから生徒のケアを優
先しちゃったわ」

結果的にも間違ってたから、問題はないでしょ？ 春霞先
生の同意に、僕は答えを返さなかった。

「奥山先輩は学校の合鍵を持っていました。それは知ってますか？」

「うん？ なんでシロっちそんな事知ってるん？ ……ま、いいか。

そうそう、それが昨日からの会議で大問題になってる。だってあれ、
生徒が単独でどうにか出来るもんじゃないからね」

単独でどうにかした人を知っている僕は、ちよっと口元が引きつ
る。が、何とかばれずに頷くことが出来た。

「普通に考えれば、教師の誰かが複製して渡したって見るべきです
よね？」

「そそ。んーでそれがいったい誰なのかって話なわけ。そんなもん
が会議で分かりや苦労しないっての。だって、ばれたらこれよこれ」

トントンと春霞先生がその小さくて細い首を手刀で切る仕草をし
ている。確かに、学校の鍵を無断で複製して、しかも生徒に渡した
となれば懲戒免職になるのは必至だ。

犯人が自分から名乗り出るはずが無い。

加えて今回はそのせいで早朝の学校で事件が起きてしまったのだから、余計だ。

学校側としてはどういう事情があるにせよ早急に犯人を見つけ出したいところだろうが、春霞先生の言うようにそう簡単には見つからないだろう。

「何だかんだで大学時代にとった教員免許が生きたかと思えば、初めての学校でこんな事件が起こるなんてね。不謹慎だとは思っけど、ついてないよ」

やれやれといった感じで、頭を振りながら春霞先生が溜息を吐く。「五輪で金を取って以降、なーんか不連続きなのよね。あれで運を使い切ったとでも言うのかしら？」

「ああ、そういや春ちゃん先生、うちの学校に来たのって事故で怪我したせいだったも　ぐふっ」

僕はデリカシーのない宗也の言葉を肘打ちで強制的に止めた。非難の目で宗也を見ると、彼はしまったというように顔を歪めている。「ああ、別にいいよ。一生柔道が出来なくなっただけでもないし、金メダリストとは言っても次の大会では三十こえちゃうからねー。そろそろ結婚でもして落ち着くのも悪くないかなって思うわけ」

ケラケラと屈託なく春霞先生が笑う。その様子に、暗いところは見られない。

結婚というキーワードが出たところで、僕は思い切って一つの質問をしてみることにした。

すなわち、春霞先生の婚約者だという天夜先生の事である。

「天夜先生？　……へえ、シロっち知ってるんだ」

すつと、春霞先生が目を細めた。何かを探るような感じで、僕のことを見つめてくる。

「……あ、よく考えればシロっちの新聞部の部長は朝霧さんだったっけ。それじゃあ知っててもおかしくないか」

静先輩の名前を口にするのと同時に、春霞先生は突然表情を明る

くし、どこか安堵したような溜息を吐き出した。それはごく小さいもので、気のせいと言われればそれまでのような、そんな感じだった。

「うん。あたしと天夜先生はいずれ結婚する仲だよ。具体的な日取りとかは決まってるけど、そうね、再来年までには子ども作らなといけないから、その前までには」

とても軽い感じで、春霞先生はしゃべっている。結婚に関する考え方は人それぞれだとは思いますが、そこに嬉しいといった感情も、不安という感情も存在していない。

無色透明。日常の中の些事。そんな印象を受けて、僕はどこか居心地の悪さを覚える。

そしてもう一つ気になる点がある。子どもを作らなければならぬというのとは、どういう事なのだろうか。

「うっわ。シロっちえぐいねー。普通気になっても空気読んで聞かないよそんな事。宗やんだっておいおいって顔してるじゃん」

先生が身体ごと引く演技を見せ、まるで僕のことを痴漢か何かでも見るような目で見てきた。

ひどい。今までにないパターンで変態として見られている気がする。

あと宗也が春霞先生の真似をして大きな身体を引きつつ同じような目をしているのが気に入らない。変態度で言えば断然宗也の方が上だというのに。

「おいおいそう睨むなよ。冗談だよ冗談」

僕の睨みで変な演技を止めた宗也が、バシバシと背中を叩いてくる。結構痛い。加減しろ馬鹿。

……で、春霞先生はいつまでそうしてるんですかね？

「ん？ 男って蔑まれると喜ぶんじゃないの？」

「それは特殊な人だけです」

「ふーん？ そうなんだ。まいいや。話戻すけど、子ども云々はなんてーか、いわゆる御家関係ってやつよ」

ひらひらと片手を振りながら、先生はとても面倒臭そうな顔をしていた。

確かに、言葉を聞くだに面倒臭さ全開な感じだ。

「春霞家と天夜家はちよつとした家の分家筋でね。本家の方で跡取りが絶えちゃつと、この両家の男女間で子どもを成して跡取りに据えるのよ。何でかは知らない。ずつとそうやってきたんだつてさ」

家系における分家の役割としてはまあまりそんな話だが、分家同士の子どもを求めるといふのはいささか珍しいかもしれない。

分家筋の有能者を後継に据える辺りが、本来の主流ではなからうか。

「そういうわけで、春霞家からはあたしが。天夜家からは天夜先生が選出されたつてわけ。ぶつちやけあたしがこの学校に来たのもそういう理由からなんだよね」

婚約者同士を同じ職場において、あわよくばさつさと子どもを成せという事なのかもしれない。

しかし、当の二人の片割れが非常にやましいことをしているのだが、それを家の人間は知っているのだろうか？　そして、相方の春霞先生も。

この辺りは肝の部分なので、ぼかしつつでも話を聞かなければならない。

「えつと、ちよつと聞きにくいんですけど」

「天夜先生が生徒とエッチしてる事？」

「え……？」

まだ何も言っていない状態で質問を看破された。しかもド直球の返し付きだ。

僕は思わず半分口を開けてぽかーんとしてしまい、隣で話を聞いていた宗也も同じような顔をしていた。

「んなもんこの学校に来たときから知ってるわよ。隠されもしなかつたしね。つーか初顔合わせで『君とは家の都合で結婚するだけだ』つて言われた。ま、あたしも子ども作つたら即離婚してやるつもり

だったからどーでもいいんだけどさ」

春霞先生はむうと頬を膨らませながら唇を尖らせている。

可愛い。年上で先生だけど可愛い。撫でたい。

しかし僕はその欲望をすんで押し留め、

「こ？」

近くにいたクロの頭を撫でることで欲望を発散させた。何故撫でられるのか理解できていないクロの表情がまた可愛い。

「け、けど春ちゃん先生、それって何かおかしくない……ですか？」
欲望の発散に忙しい僕の代わりに、呆然から立ち直った宗也が僕と同じ考えの疑問をぶつける。

そう。例えば家の都合なのだとしても、僕らの考える結婚というのはそんなものではない。

そんな、仕方なくだとか、作業みたいな行為ではないはずだった。「そんなもんよ。君たちはまだ学生で子どもだから純粋なところも多いんだろうけど、大人になれば嫌でも分かるって」

だからあたしはずっと柔道に打ち込んできたのかもしれないけど、続けた春霞先生は、どこか冷めて、諦めているような感じがした。いつも明るい先生からは想像出来ない、闇のようなものを垣間見 てしまった気がする。

「ま、そんなわけで奥山も天夜先生と関係があつたみたいだけど、あいつは特別な誰かって相手を作らない遊び人だから、わざわざ鍵を複製して渡すような真似はしれないと思うんだよね。というか、そもそも学校の鍵を渡しておく事にメリットってなくない？」

鍵を渡すことのメリット。言われてみれば、確かになんなのだろうか？

密会をし易くするためだろうか？ いや、学校に自由に入出入りができる様になる利点は、施錠されて以後の話になる。すなわち夜から早朝の時間帯だ。

人目を忍ぶにはいいだろうが、わざわざ学校を指定する意味が無い。人目を忍ぶのに適した場所は他にいくらでもあるのだから。

学校でなければならぬ理由が見当たらない。

では、何故奥山宏美は鍵を所持していた？ 誰が、何の目的で彼女に鍵を渡したのだ？

「あるいは、今回の件とはまったく別のところで手に入れたのか、かしらね」

春霞先生が難しい顔で思案している。

確かに、そういう事も考えられる。静先輩にしても自分のために鍵を所持している。

奥山宏美も、何かの目的があつて鍵を所持していたとすれば、鍵を所持していたことと事件とは全く関連が無いことになる。

……いや、ちょっと待て。確か静先輩に見せてもらった写真には、もう一つの物が写っていた。

「猫のキーホルダー……」

「え？」

ポツリとした僕の言葉に、春霞先生が首を傾げる。隣の宗谷は、何かを思い出したようにポンと手を打っていた。

奥山宏美は鍵にキーホルダーをつけていた。天夜先生にももらったという、猫のキーホルダーを。

思いを寄せている相手からもらった物を、相手と関連のない物に付けたりするだろうか？ 鍵に取り付けたという事には、多分何かしら意味があるはずだ。

「でも、それだと天夜先生が渡したって可能性が高くなるわけよね？」

「……なんですよね。さっきの考えと矛盾してしまうわけなんですが……」

状況的には天夜先生が渡したものと見るのがしっくり来るような状況だ。

けど、その意味が推測出来ない。女子生徒との遊びを目的としている天夜先生が、その内の一人に過ぎない奥山宏美に鍵を渡す必要性が無い。

もし何かしらの意図で渡しているのなら、他の生徒も所持しているもおかしくはない事になる。

だが、そこまで大量に複製品を渡していれば、事が露呈する危険性が鰻登りになってしまう。さすがにそれはありえないだろう。

……今これ以上考えてもこんがらがりそうだ。後で整理する時にもう一度考えよう。

「あ、そういえば聞き忘れてたんですけど、春霞先生この一週間の内に奥山宏美が来て何か聞かれませんでした？」

「え？ あ、うん。来たよ。あたしと天夜先生の間を聞かれたから、正直に婚約者だって答えた」

「どう、なりました？」

「うーん……、何かこれといってあったわけじゃなかったしなあ。ちよつと驚いた感じだったけど、それだけですぐどっか行っちゃったからね」

人差し指をあごに当て、春霞先生は視線を斜め上に向けてその時の事を思い出しているようだった。

「他に何か、気にあるようなことか言ってますでした？」

「なーんにも。あたしとしても何を言ってくるかと思っただけだね。拍子抜けしたくらい」

春霞先生が肩をすくめる。

今の言い方からして、奥山宏美が天夜先生と関係のある生徒という事は知っていたのだろう。

おそらくは春霞先生と天夜先生の間を知らなかった奥山宏美は、その事を知ってどんな行動にでたのだろうか？

「先生、奥山宏美が先生のところに来たのって、いつですか？」

「えーっと、ひいふう……三日前かな。だから昨日を基準にすれば二日前だね」

春霞先生と天夜先生との関係を奥山宏美が知ったのが事件の二日前。

天夜先生と関係のありそうな生徒と接触し始めたのが事件の一週

間前。

それまでの彼女は、あまり周りと関係を持つとしない生徒だった。

何が彼女を変えたのか？ 一つ考えられるのは

静先輩に確認してみよう。

僕は思いついたことを口にはせず、胸の内に留める。

ふと時計を確認すると、もうそろそろ五時を回りそうな時間だった。今日中に行っておきたい場所へ行かなければならない時間である。

「どしたシロっち？」

急に黙り込んだ僕が気になったのか、春霞先生がひらひらと僕の前で手を振る。

「あ、いえ。お話ありがとうございます。ちょっと行かなきゃならないところがあるので、僕はこれで。……クロ、行くよ」

「こ」

いつの間にか離れたところで掲示板を眺めていたクロは、僕の呼びかけに反応して素早く近寄ってくる。

「それじゃあ、失礼します。宗也、大会近いんだから、みっちり春霞先生に鍛えてもらえよ」

「おう。高校でも表彰台は頂くぜ」

「中学と高校じゃレベルが違うわよ？ ま、あたしが教えるんだからまかり間違っても一回戦敗退はないわね。もし負けたら」

「コキツ、と春霞先生が手の関節を鳴らす。瞬間、僕の、そしておそらく宗也の脳裏にもある光景がフラッシュバックした。

百五十センチの春霞先生が百八十を超える長身の男子生徒を力づくで跪かせ、泣いて許しを請うその顔面に強烈なアイアンクローを見舞う、悪夢のような光景だ。

ちよっと問題になりかけたが、男子生徒が無かった事にしてほとんどの記憶を消去したため、うやむやになっている。

その時も、春霞先生は今のよう手を鳴らしていた。

「 分かってるよね、宗やん? 」

「 イエス・マム! 」

宗也が神速の反応で敬礼した。お前は何処の兵隊だ。

とはいえ気持ちは分かるので突っ込みはしない。

僕はク口を連れ、そそくさとその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4006y/>

KURO～気まぐれネコは事件と遊ぶ～

2011年11月26日23時56分発行